

真地御殿後原遺跡

—光明寺沖縄別院建設に伴う緊急発掘調査報告—

2022（令和4）年3月

那霸市

まーじうどうんくしばるいせき
真地御殿後原遺跡

—光明寺沖縄別院建設に伴う緊急発掘調査報告—

序

本書は、光明寺沖縄別院建設設計画に伴って2019（令和元）年度に実施した「真地御殿後原遺跡」の緊急発掘調査の成果をまとめたものです。

「真地御殿後原遺跡」は、首里城が所在する台地の南側、安里川と国場川に挟まれた識名台地に位置します。琉球王国時代の王家の別邸である「識名園」に近接して所在し、また、拝所である「シイマノ嶽」などの文化財が多く見られる地域でもあります。

今回の発掘調査では、耕具痕やピット、土坑、焼土遺構、炭溜遺構、溝状遺構など多様な遺構が検出されました。出土遺物としては、徳之島カムイ窯須恵器を主体にグスク土器が出土しています。その他に、中国産の白磁や滑石片も僅かに得られました。これらのことから、本遺跡は、12～13世紀頃の集落あるいは生産遺跡としての性格が想像されます。

また、出土した土器の中には、沖縄貝塚時代中期（縄文時代晚期相当期）とみられる資料も含まれることから、本遺跡を含む周辺には、より古い時代の遺跡が存在していたものと考えられます。

今後、周辺の調査成果を整理し、詳細な考察を進めることで、グスク時代及び先史時代における識名台地（真地地区）の歴史の一端が、明らかになると期待されます。

本報告書が、市民の皆様はもとより多くの方々に活用され、文化財保護行政の一助となれば幸いです。

末尾になりましたが、発掘調査作業ならびに、本報告書を作成するにあたってご協力いただきました関係各位に、深く感謝申し上げます。

2022（令和4）年3月

那覇市長 城間 幹子

例　言

1. 本報告書は、宗教法人光明寺の依頼を受けて、2019（令和元）年度に実施した「真地御殿後原遺跡緊急発掘調査」の成果を収録したものである。
2. 発掘調査は、宗教法人光明寺及び株式会社豊田自動織機などの協力を得て、那覇市（市民文化部　文化財課）の指導のもと実施された。
3. 試掘調査は、那覇市文化財課（玉城安明・吉田健太・島弘・渡辺幸夫・山道岐・名嘉山美野・高良夏枝・阿部直子・泉谷星・小原忍）によって平成30年度に実施された。
4. 発掘調査及び資料整理・報告書作成では、下記の方々に協力・指導を得た。記して感謝申し上げる。
 - ・大洞龍真・中村千里（光明寺　沖縄別院）
 - ・高橋徹也・上野祐一（株式会社　豊田自動織機）
 - ・横尾裕二・山城和義・玉城強（有限会社　大地建設）
 - ・末松信吾・比嘉夏子（株式会社　エスエヌジーデザイン）
 - ・吉岡宏・友寄英人・宮城龍一・野田真吾（有限会社　ティガネー）
 - ・上田圭一・斎藤嵩人・栗原繁和・田中義文・松元美由紀・芝口怜

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

 - ・鈴木悠・江上輝（那覇市文化財課文化財グループ）
 - ・外間政明・伊集守道（那覇市文化財課歴史博物館グループ）
 - ・樋口麻子・天久瑞香・島弘（那覇市文化財課埋蔵文化財グループ・開発調整グループ）
 - ・加納立巳・玉城美野・高良夏枝・真栄城和美・小原忍・国吉真由美

（那覇市文化財課会計年度任用職員）
5. 図版1の空中写真（平成5年撮影）、図版2の空中写真（平成21年撮影）、第1図の那覇市全図（S=1:50,000 平成19年12月1日発行）、第2図の那覇市全図（S=1:25,000 平成21年11月1日発行）、第3図の1万分の1地形図　那覇（S=1:10,000 平成17年4月1日発行）は、国土地理院発行のものを複製・縮少して使用した。
6. 第1図に使用した広域図は、『ブリタニカ国際地図』 株式会社 ティビーエス・ブリタニカ 1991年7月1日（第2版改訂発行）の91ページの部分をトレースして使用した。
7. 第4図は、「都市計画図 1:2,500 平成7年12月修正 那覇市作成」を複写、加筆して使用した。

8. 第5図は、『真和志地区旧跡・歴史的地名地図』那覇市文化局歴史資料室作成の一部を複写、加筆して使用した。
9. 第6図は、『開発調整マップ』 那覇市教育委員会 1998年3月版の一部を複写、加筆して使用した。
10. 第7図～第12図は、有限会社ティガネー作成の写真測量図を一部加筆して使用した。
11. 第2表は、高宮廣衛『沖縄先史遺跡と文化』(株)第一書房 1994年3月 133ページより引用した表を参考にした。
12. 本遺跡から採取した土壌について、耕作土・植物遺体の検討などを行うための自然科学分析を、パリノ・サーヴェイ株式会社 沖縄支店に委託した。
13. 本報告書の図及び表に記した座標値は、世界測地系（第XV系）を基本とした。
14. 本報告書の編集・執筆は、樋口麻子の協力を得て仲宗根が行った。
15. 採図番号と写真図版の番号は、一致するように配置した。
16. 出土遺物は、那覇市（市民文化部 文化財課）で保管している。

目次

序

例言

第Ⅰ章	調査に至る経緯	1
第Ⅱ章	遺跡の位置と環境	1
第Ⅲ章	調査経過と調査組織	9
	第1節　調査経過	9
	第2節　調査組織	11
第Ⅳ章	層序	13
第Ⅴ章	遺構	21
	1. ピット・耕具痕	
	2. 土坑	
	3. 炭溜遺構	
	4. 焼土遺構	
	5. 溝状遺構	
第VI章	遺物	23
	1. 土器	
	2. 中国産白磁	
	3. 徳之島カムイ窯須恵器	
	4. 石器	
第VII章	まとめ	32

報告書抄録

挿図目次

第1図	那覇市の位置と遺跡の位置	3
第2図	那覇市内の主な遺跡	4
第3図	遺跡周辺の地形(平成17年)	5
第4図	遺跡周辺の地形(平成7年)	6
第5図	遺跡周辺の文化財分布	7
第6図	遺跡周辺の文化財分布	8
第7図	N-16グリッド南壁層序	13
第8図	S-15グリッド東壁層序	13
第9図	遺跡の層序	15
第10図	調査区平面図(オルソ図)	17
第11図	調査区平面図	19
第12図	Q・R-12・13グリッド平面図	22
第13図	土器、中国産白磁	28
第14図	徳之島カムイ窯須恵器	29
第15図	徳之島カムイ窯須恵器	30
第16図	石器	31

図版目次

図版 1	遺跡一帯の空中写真(平成5年撮影)
図版 2	遺跡一帯の空中写真(平成21年撮影)
図版 3	遺跡の遠景
図版 4	発掘調査の状況
図版 5	発掘調査の状況
図版 6	発掘調査の状況及び資料整理の状況
図版 7	土器、中国産白磁
図版 8	徳之島カムイ窯須恵器
図版 9	徳之島カムイ窯須恵器
図版 10	石器

挿表目次

第1表	調査工程	9
第2表	沖縄諸島の暫定編年	23
第3表	ドット遺物一覧	25
第4表	土器、中国産白磁観察一覧	26
第5表	徳之島カムイ窯須恵器観察一覧	26
第6表	徳之島カムイ窯須恵器観察一覧	27
第7表	石器観察一覧	27

第Ⅰ章 調査に至る経緯

今回の調査は、那覇市字真地御殿後原地内における寺院建設計画に伴って実施されたものである。

宗教法人光明寺（以下、光明寺）と那覇市（以下、市）が『（仮称）光明寺沖縄分院建設に係る埋蔵文化財に関する協定書』を締結（令和元年8月1日付）、同時に、光明寺・市・株式会社豊田自動織機の三者にて『令和元年度真地御殿後原遺跡発掘調査に係る協定書』を締結（令和元年8月1日付）して、2019年度（令和元年度）に記録保存のための発掘調査（現地調査）を実施した。

本調査地区は、平成31年2月22日付、那覇市教育委員会あて「埋蔵文化財事前審査願（30-709）」が提出されたことが調査の契機であった。

「埋蔵文化財事前審査願」の提出に伴い、同地域が「識名シーマ御殿遺跡」に近接していることから、那覇市市民文化部文化財課（以下、市文化財課）によって、平成31年3月18日～3月29日までの期間で試掘調査が実施された。その調査（申請敷地内の9箇所）の結果、遺物包含層（黒色土）の堆積が確認され、地山上（赤土：島尻マージ）には耕作痕（鋸跡）やピット状の遺構を確認し、中国産白磁玉縁口縁碗や徳之島カムイ窯須恵器が得られた。これらのことから平成31年4月15日付、那覇市教育委員会より地権者あてに、「遺跡あり」（グスク時代の生産遺跡などが、確認されました。申請地内には埋蔵文化財が包蔵されていますので、保存のための調整が必要です。）と回答された（埋蔵文化財事前審査報告書30-709-1）。

その後、遺跡の取り扱いについて、市文化財課と光明寺（地権者）及び建築設計・施工業者等との間で調整が行われた。調整の中で、敷地北側に寺院建設、南側に庭園・駐車場の配置を計画することとし、寺院建設計画範囲の基礎の深度は埋蔵文化財包蔵地に達するものの、南側については掘削深度を浅く設計できる等の見通しが示された。その結果、遺跡の一部（敷地南側）の保存は可能であり、北側の寺院建設計画範囲内に堆積する遺物包含層を対象に、記録保存の処置を講じることとなった。本発掘調査は、令和元年10月1日～12月6日の期間で実施された。

また、資料整理業務は、市と光明寺との間で協定書（「令和2年度 真地御殿後原遺跡発掘調査（資料整理）業務」 令和2年6月29日付）を締結し、令和2年8月3日～令和3年3月31日まで行った。報告書作成業務は、令和3年度に行った（協定書（「令和3年度 真地御殿後原遺跡発掘調査（報告書作成）業務」 令和4年1月11日付締結）。

参考

那覇市文化財調査報告書 第5集『那覇市の遺跡一詳細分布調査報告書一』 那覇市教育委員会（1982年3月）

『那覇市歴史地図－文化遺産悉皆調査報告書－』 那覇市教育委員会（昭和六一年三月）

『開発調整マップ』 那覇市教育委員会 文化財分布図（1998年3月版）

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

「真地御殿後原遺跡」は、沖縄県那覇市字真地御殿後原地内に所在する。

那覇市の位置について市のホームページによると、「沖縄県は、北緯24～28度、東経122～133度

の南北約400km、東西約1,000kmの海上に弧を描いて連なる160の島しょの内、有人島39からなっています。その中で那覇市は最大の島、沖縄本島南部に位置します。また、本市は鹿児島と台北のほとんど中間にあり、那覇を中心とする1,500kmの円周域には、東京、ビヨンヤン、香港、ソウル、北京、マニラなどの主要な都市があり、交通通信機能の上からも東南アジアの各都市を結ぶ要衝の地点であり、わが国の南の玄関として地理的に好条件の位置にあります。」と紹介されている（第1図）。

市域は、東西10km、南北8kmの面積41.42km²（令和3年4月1日時点、国土地理院）を測り、北側に浦添市、西側に西原町、南西側に南風原町、南側に豊見城市が接している。人口は、318,376人（2021（令和3）年11月末現在）である。

地形は、旧市内を中心とする中央部において、ほぼ平坦面をなし、北側に天久台地、東側に首里台地、南西側に識名台地、南側に小禄台地等の丘陵・台地地帯がその周辺を取り囲む。その丘陵・台地地帯を源流とする河川が、市内を東から流れて東シナ海へと注いでいる。市の北側から安謝川、安里川、国場川が西流し、その間に、久茂地川やガーブ川などが流れる。

地質は、島尻層（第三紀中新世）、琉球石灰岩（第四紀更新世）、沖積層などの堆積が見られる。その分布状況は、旧市街地及び首里から天久、安謝における一帯並びに識名付近で琉球石灰岩が露頭し、その他の地域の地表面は島尻層からなっている。旧市内の低地では、海浜堆積物が見られる。

那覇市内の主な遺跡（沖縄貝塚時代中期、グスク時代）を第2図に、真地御殿後原遺跡周辺の主な文化財を『真和志地区 旧跡・歴史的地区名地図』・『開発調整マップ』を参考に第5・6図に示した。琉球王国時代に造園された世界遺産でもある「識名園」の周辺に多くの文化財が所在する地域の中で、真地御殿後原遺跡は「シイマノ嶽」に近接している。古くから「シイマノ嶽」周辺の識名台地は、重要な地域であったことが指摘されている。平成5年度には、「識名シーマ御嶽遺跡」の発掘調査が実施されており、当該地におけるグスク時代の様相の一端が解明されている。

また、識名園の南側一帯には、沖縄貝塚時代中期の「識名園内遺跡」が所在しており、先史時代から人々の生活環境が良好であったことがうかがえる。

本遺跡の発掘調査は、今後、周辺地域における埋蔵文化財の新たな発見へつながる大きな成果と言える。

【参考文献】

「那覇市 位置・面積」 那覇市ホームページ
『広報 なは 市民の友 第852号』 那覇市 2022年（令和4）1月

『令和3年度 市政概要』 那覇市議会事務局 令和3年9月

『令和3年度 那覇市の教育』 那覇市教育委員会 令和3年8月

『沖縄大百科事典 下巻』 沖縄タイムス社 1983年5月30日発行

『角川日本地名大辞典 47 沖縄県』 角川日本地名大辞典編纂委員会 昭和61年7月8日

『真和志地区 旧跡・歴史的地区名地図』 那覇市文化局歴史資料室 1998年3月

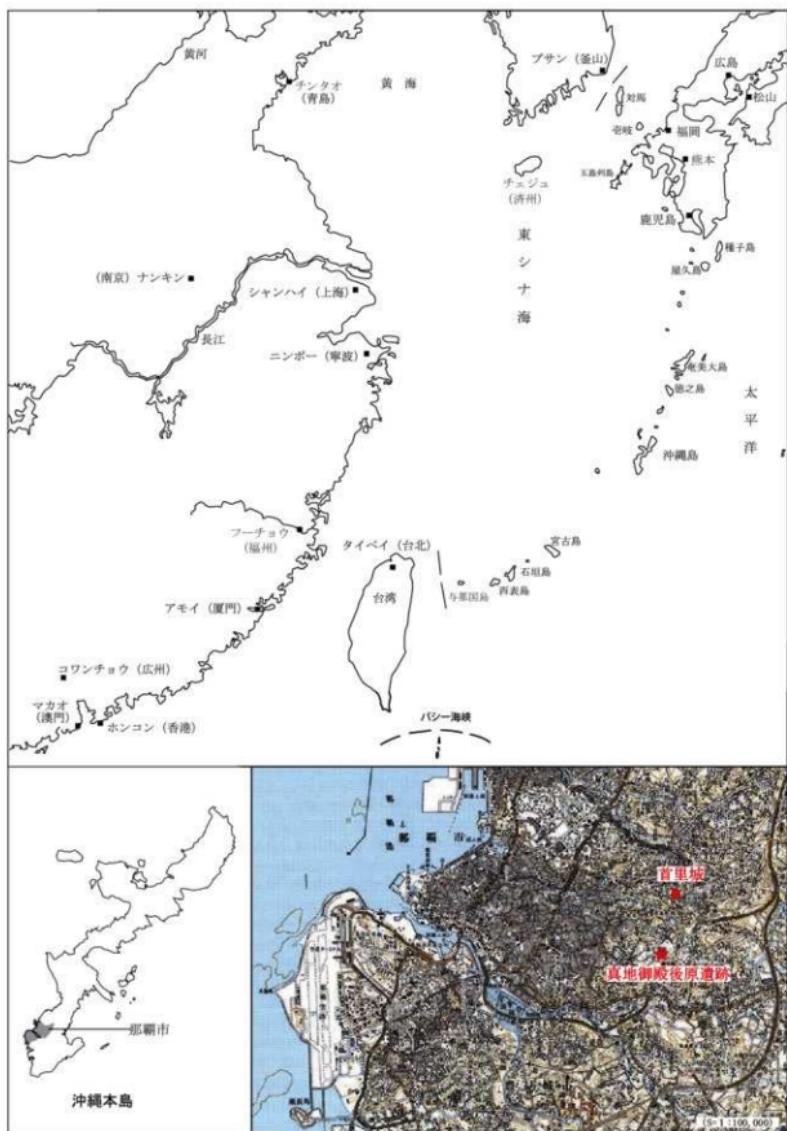
『開発調整マップ』 那覇市教育委員会文化課 文化財分布図（1998年3月版）

『那覇市歴史地図―文化遺産悉皆調査報告書一』 那覇市教育委員会文化課 1986年3月31日

那覇市文化財調査報告書 第5集 『那覇市の遺跡―詳細分布調査報告書一』 那覇市教育委員会 1982年3月

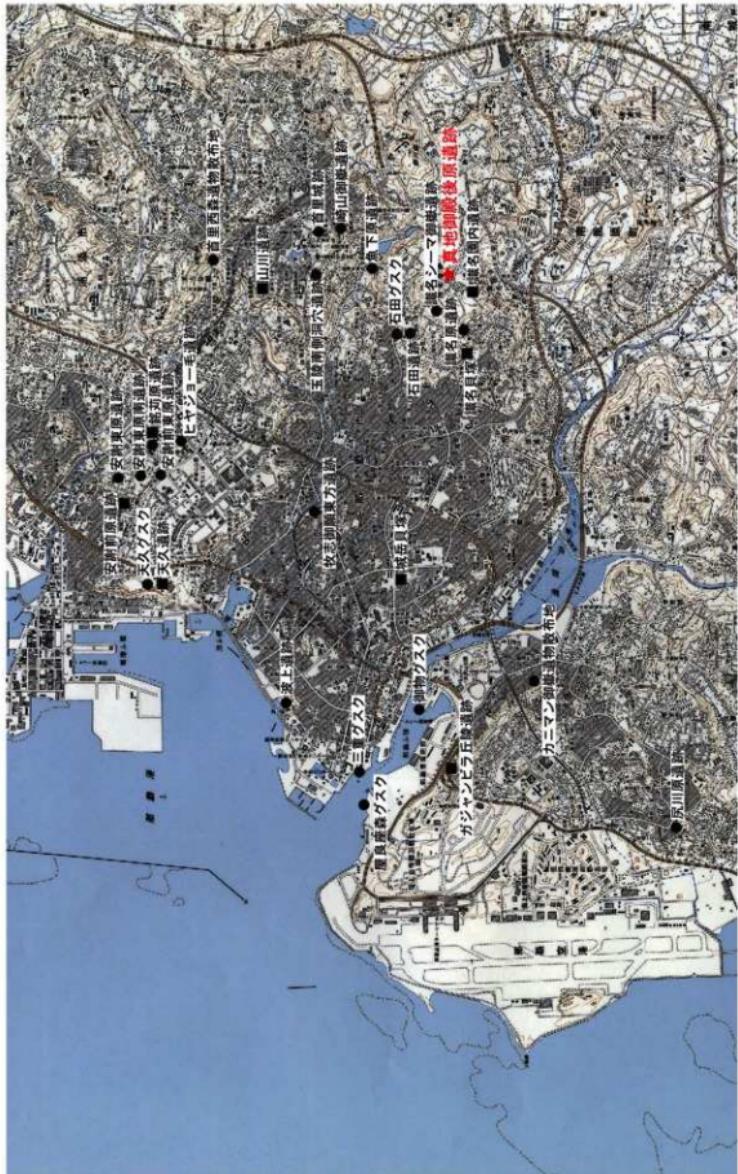
那覇市文化財調査報告書 第34集 『識名シーマ御嶽遺跡』 那覇市教育委員会 1997年3月

那覇市文化財調査報告書 第35集 『銘苅原遺跡』 那覇市教育委員会 1997年3月



第1図 那覇市の位置と遺跡の位置

(S=1:50,000)

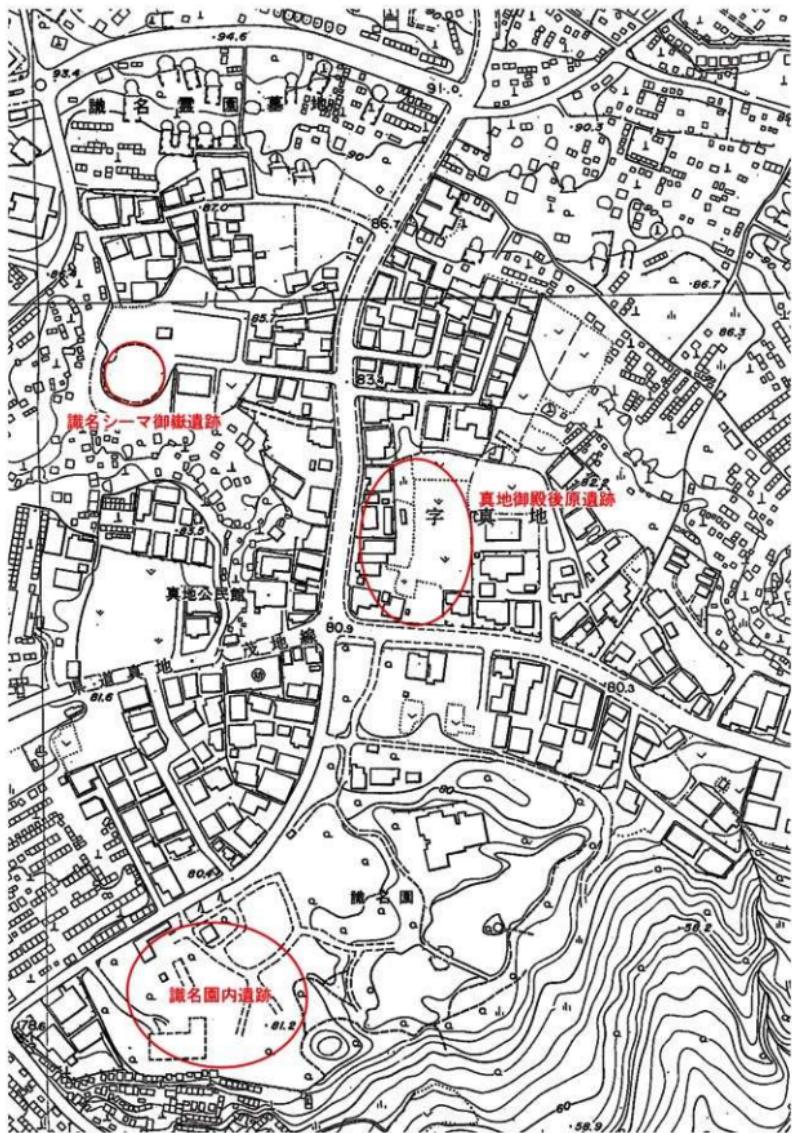


第2図 那須市内の主な遺跡 (●:ダスク時代, ■:貝塚時代中期)



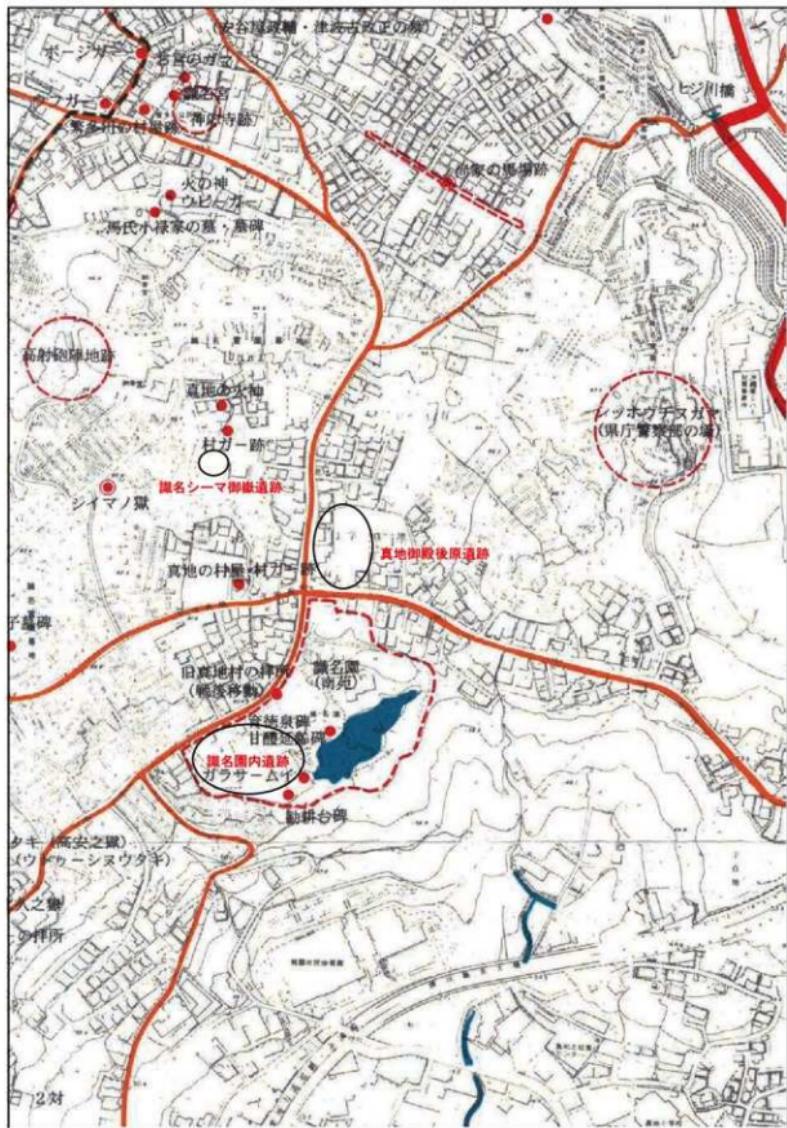
第3図 遺跡周辺の地形（平成17年）

(S=1 : 10,000)



第4図 遺跡周辺の地形（平成 7 年）

(S=1 : 2,500)



第5図 遺跡周辺の文化財分布（真和志地区 旧跡・歴史的地名地図）

(S=1:6,000)



第6図 遺跡周辺の文化財分布（開発調整マップ）

(S=1 : 10,000)

第Ⅲ章 調査経過と調査組織

第1節 調査経過

本調査は、第Ⅰ章でも述べたとおり、2019（令和元）年10月1日～2019（令和元）年12月6日の期間で実施された。なお、人力掘削開始前の表土剥ぎ作業及び磁気探査業務については、本調査開始前の9月に、断続的に市文化財課職員の立会のもと行われた。

また、資料整理作業は、2020（令和2）年度に行い、報告書作成作業は、2021（令和3）年度に実施した（第1表）。

調査は、地権者及び建築設計・施工業者等からの多大な協力を得て行われた。

本遺跡の調査は、「真地御殿後原遺跡」における遺物包含層の掘削及び構造の検出を、主要な目的とした。

第Ⅰ章で述べたとおり、試掘調査によって確認された埋蔵文化財包蔵地の一部は、建築物等の範囲外に現地保存することができた。これは、遺跡保存における大きな成果であった。

発掘調査は、敷地内に4m×4mのグリッドを公共座標軸に沿うように設定した（第10・11図）。

調査グリッドは、西から東にアルファベット（J～S）、北から南に算用数字（8～21）を付した。その呼称は、北東の交点を基軸として「R-13、S-14・・・」とした。

以下、本調査の概要を業務日誌を元に略記する。

第1表 調査工程

年度 工程	2018年度 (平成30年度)	2019年度 (平成31・令和元年度)	2020年度 (令和2年度)	2021年度 (令和3年度)
試掘調査	→			
発掘調査		→		
資料整理			→	
報告書作成				→

2019（令和元）年

10月1日（火）晴れ

調査区の東側（S-13～S-20 グリッド）に、トレンチを設定する。現地調査（人掘削作業）を開始する。Rグリッドラインを、簡易的に設定開始する。

7日（月）晴れ

グリッド基本杭の設定作業を行う。調査区を十字に通るラインを設けるための、測量作業を開始する。S-20 グリッドにおいて、カムイ焼、滑石小片等の遺物が得られ始める。また、焼土の広がりを確認する。

9日（水）晴れ

S・R-13 グリッドにおいて、耕具痕と考えられる遺構が確認され始める。

11日（金）晴れ

R-12 グリッド地山直上において、グスク土器（縦耳付き）出土する（番号 32 R-12 ドット No.1）。K-13 グリッド第IV層、Q-13 グリッド第III・IV層の掘削を開始する。

23日（水）晴れ

11 グリッドライン設定作業を行う。Q・R-12 グリッド第III層の掘り下げ作業を行う。

25日（金）晴れ

水準点移動作業のため、遺跡周辺の基準点の確認作業を行う。

29日（火）晴れ

Q-12 グリッド第IV層にて、中国産白磁玉縁口縁碗が出土する（番号 16 Q-12 ドット No.1）。

30日（水）

L～S-15～20 グリッド設定作業を行う。遺跡の平面図及び土層図については、写真測量にて行うこととした。事前の打ち合わせ会議を行う。

31日（木）晴れ

O・N-12 グリッド第III・IV層の掘り下げ作業を、継続する。P-12 グリッドにおいて、溝状遺構（近世期か）の検出作業を行う。バックホーによる作業をほぼ完了する。

11月7日（木）晴れ後くもり

調査区内への水準点移動作業を行う。調査区東側壁（Sグリッドライン）の分層作業を行う。

13日（水）晴れ

調査区南側壁（16 グリッドライン）の分層作業を行う。

15日（金）晴れ

調査区全体での遺構検出作業のため、地山面の精査作業を実施する。写真測量工程調整を行う。

18日（月）くもり後雨

光明寺関係者（住職ほか）が、調査区を視察する。

19日（火）くもり

昨日の雨の影響で調査区内のコンディションが悪いため、現地作業を休止した。

20日（水）くもり一時雨

K-9 グリッド地山直上にて、貝塚時代中期（縄文時代晚期相当期）の土器が出土する（番号 2 K-9 ドット No.1）。

27日（水）くもり後晴れ

調査区の清掃及び遺構検出作業と並行しながら、写真測量作業を開始する（～30日）。

12月2日（月）くもり一時小雨

Q～S-14～20 グリッド出土のドット遺物取り上げ作業を、行う。O-16 グリッド南壁及びS-15 グリッド東壁の土層サンプルを、採取する。S-20 グリッド検出遺構（焼土遺構）半裁作業を、完了する。Q-16 グリッド検出遺構（炭溜遺構）、S・R-18・19 及び20 グリッド検出遺構（溝状遺構）など各遺構の半裁作業を行う。

3日（火）くもり後晴れ

S・R-18・19 グリッド検出遺構（溝状遺構）の断面実測など、遺構の実測作業を行う。

4日（水）

高所作業車及びドローンにて、遺跡の全景・遠景について写真撮影を行う。

5日（木）雨

S-12・13 グリッド検出遺構（ピット・耕具痕）の断面実測作業を行う。本日にて、現地での調査を終了する。

6日（金）雨

写真測量成果品の確認を行う。

第2節 調査組織

本遺跡の調査組織は以下のとおりである。

（1）調査組織（発掘調査：令和元年度、資料整理：令和2年度、報告書作成：令和3年度）

事業主体 那覇市 市長 城間 幹子（令和元年度～令和3年度）

市民文化部 部長 比嘉 世頬（令和元年度～令和3年度）

副部長 渡慶次 一司（令和元年度）

" 儀間 ひろみ（令和2年度）

" 加治屋 理華（令和3年度）

事業所管 文化財課 課長 末吉 正睦（令和元年度）

" 大城 敦子（令和2・3年度）

調査総括 文化財課 副参事 内間 靖（令和元年度）

" 王城 安明（令和2・3年度）

調査事務 文化財課 副参事 内間 靖（令和元年度）

" 王城 安明（令和2・3年度）

主　　査	宮里　浩子	(令和元年度～令和3年度)
主任主事	前森　恵理子	(令和元・2年度)
"	東江　俊弥	(令和3年度)
主　　事	富本　文江	(令和元年度)
調査担当	文化財課（埋文G）副参事	内間　靖（令和元年度）
	"	玉城　安明（令和2・3年度）
	専門員主査	仲宗根　啓（令和元年度）
	"	樋口　麻子（令和元年度～令和3年度）
	主任専門員	當銘　由嗣（令和元年度～令和2年度）
	主任学芸員	天久　瑞香（令和元年度～令和3年度）
	主任学芸員	安斎　真知子（令和元年度）
	学芸員	山道　岐（令和2・3年度）
非常勤・会計年度任用職員	高良	夏枝（令和元年度～令和3年度）
"	名嘉山（玉城）	美野（令和元年度）
"	阿部	直子（令和2・3年度）
(開調G) 主幹	玉城	安明（令和元年度）
"	仲宗根	啓（令和2・3年度）
主任学芸員	安斎　真知子	（令和2・3年度）
"	吉田	健太（令和元年度～令和3年度）
主任主事	島	弘（令和元・2年度）
主　　事	木野	沙央里（令和3年度）
非常勤・会計年度任用職員	徳元	剛（令和元年度～令和3年度）
"	渡辺	幸夫（令和元年度～令和3年度）
"	山道	岐（令和元年度）
"	中村	圭吾（令和2年度）
"	島	弘（令和3年度）
"	糸数	菜菜（令和3年度）
"	玉城	美野（令和2・3年度）

(文化財G) (歴史博物館G) (壺屋焼物博物館)

発掘調査作業員（令和元年度）：原因者側直接雇用

安里 勝則 阿部 直子 伊敷 政和 泉谷 増 小原 忍 玉城 洋子
中村 フサ子 本永 常彦 堀嘉比 茂

資料整理作業（令和2年度：会計年度任用職員）

玉城 洋子

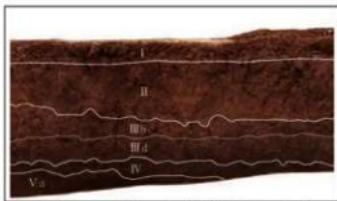
第IV章 層序

本遺跡の層序は、大きく五枚に大別した（第7～9図）。

最上部第I層は表土層である。次に、第II層が近世以降の土層、その下層に第III層及び第IV層（本遺跡の主要土層）が堆積する。最下層は第V層であり、2枚に細分した。第V b層が地山（赤土：島尻マージ）である。暗褐色及び一部黒色を呈する第III・IV層を、遺物包含層とした。第III層は4枚に細分できたが、時期的な相違は認められない。

層厚約30～60cmである。出土遺物はグスク土器、中国産白磁、徳之島カムイ窯須恵器が主要なものであるが、第III層と第IV層の明確な出土状況の差異は認められない。また、第Va層はマージ土を主体とするが黒色味を帯びる色調を呈し、暗褐色の塊が多数混入する。第II層～第V層については、土壤のサンプリングを行い、資料の一部は科学分析を行うことができた。出土遺物の一部については、座標値及び標高を記録して取り上げた（第10～12図 第3表参照）。なお、土層の色調は視覚的な観察を主に行い、第III・IV・V層は『標準土色帖』も参考にした。

以下に、層序の概略を記す。



第7図 N-16グリッド南壁層序(S=1/60)



第8図 S-15グリッド東壁層序(S=1/30)

第Ⅰ層 表土層

近現代の造成土。層厚は約 50 cm。

第Ⅱ層 明橙色

サラサラした手触り。直径約 1 mm の黒色粒子が混入する。層厚は約 50 cm。

第Ⅲ層 (層厚 30~60 cm)

a 層 暗褐色土 (10YR 4/6)

直径約 1 mm の焼土、黒色粒子を微量に含む。上層の影響か、サラサラした手触りが残る。B・C 層に比べ、視覚的に明るく見える。層厚は約 20 cm。

b 層 暗橙褐色土 (10YR 4/6)

直径約 1 mm の焼土粒、黒色粒子が若干混入する。粘性は、下層の第IV層より低い。層厚は約 20 cm。

C 層 淡褐色 (10YR 3/4)。

直径約 2 mm の黒色粒、直径約 3 mm の赤色粒を多量に含む。粘性が強みを帯びる。下層の第IV層が、ブロック状に混入する部分が見られる。層厚は、約 25 cm。

d 層 暗褐色土

直径約 1 mm の焼土粒、黒色粒子が若干混入する。乾燥すると、第IV層との区別が困難な状況となった。層厚は、約 25 cm。

第Ⅳ層 暗褐色土 (10YR 3/4)

直径約 1 mm の焼土粒、黒色粒が多く混入する。粘性を強く帯びているものの、乾燥するとバサバサした土となる。下層の第V層との攪拌が見られる箇所がある。層厚は約 20 cm。

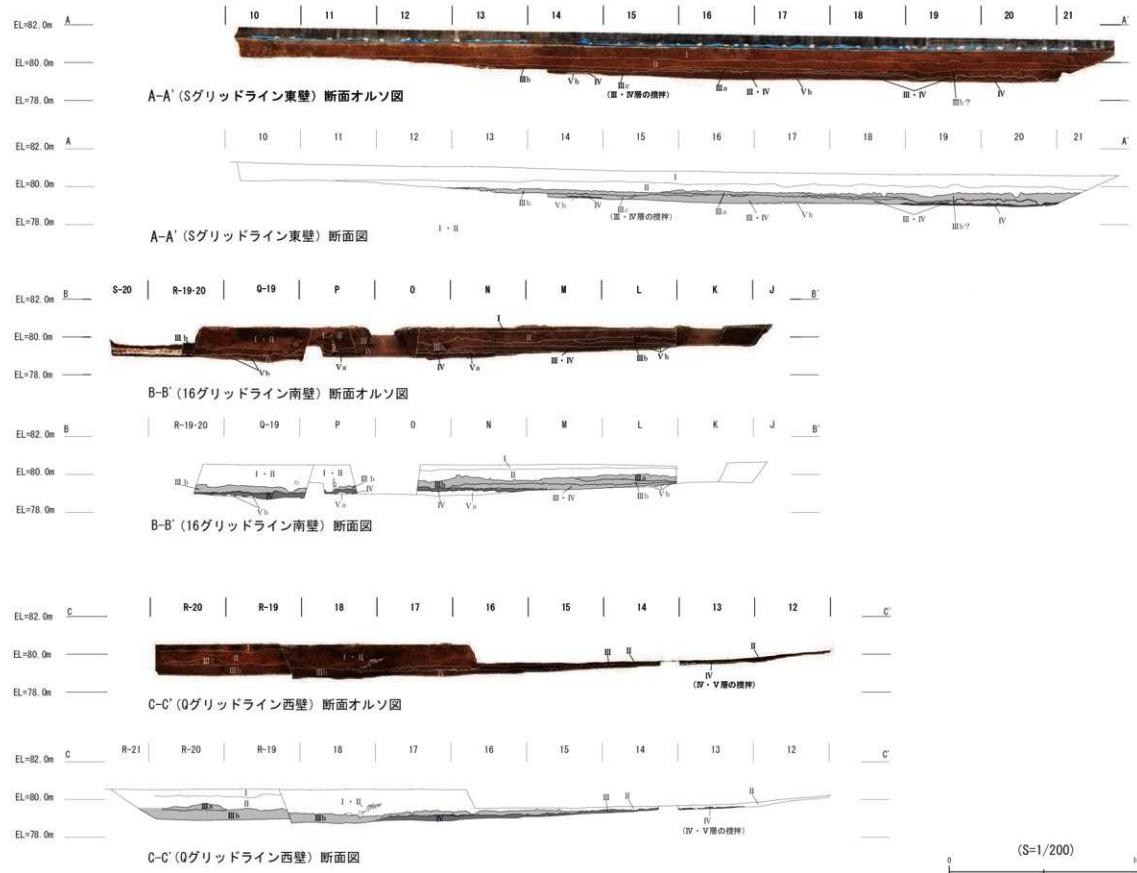
第Ⅴ層

a 層 暗褐色土 (7.5YR 2/3)

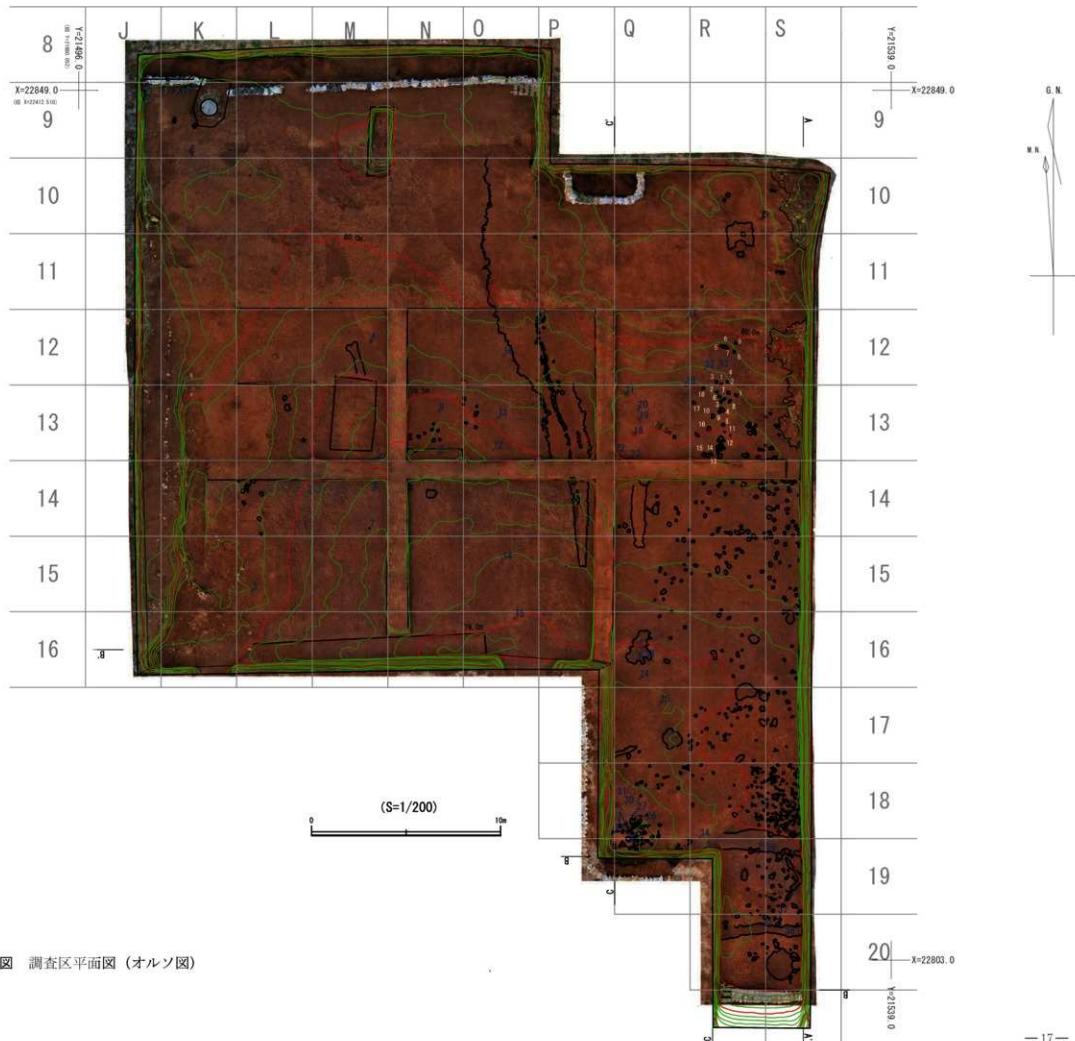
粘性は強いものの、乾燥するとバサバサした土となる。直径約 2 mm~3 mm の黒色土粒を、多量に含む。赤色粒の混入も、若干見られる。

b 層 黄褐色土 (10YR 5/6)

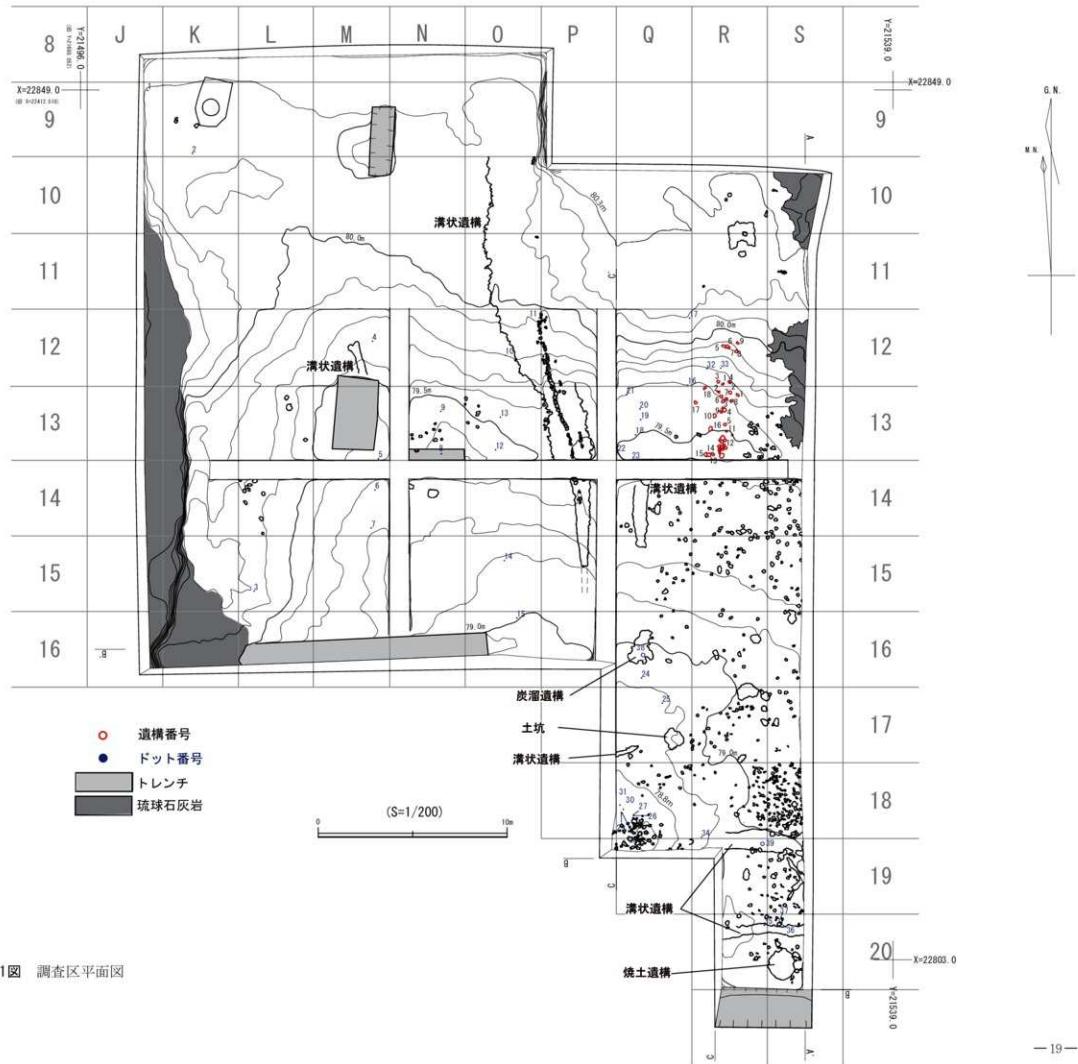
強い粘性を帯びる地山層。琉球石灰岩の風化土とされる赤土層（島尻マージ）。



第9図 遺跡の層序



第10図 調査区平面図（オルソ図）



第11図 調査区平面図

第V章 遺構

今回の調査で確認された遺構は、ピット・耕具痕、土坑・炭溜遺構、焼土遺構、溝状遺構であった。（第10～12図 図版4・5）。調査区東側の第V層直上付近において、遺構が確認されている。調査区の北側（標高約80.3m）から南西側（標高約78.8m）にかけて、傾斜する。調査区東側（R・Sグリッドライン）では密で、調査区西側では希薄となる傾向が見られた。各遺構の特徴等を、以下に略記する。

1. ピット・耕具痕

R-12・13グリッドにおいて、遺構番号を付して半裁を行った。その後、断面実測を実施した。また、半裁にて採取した土壤については、サンプリングを行った。ピットとした遺構は、平面は梢円形を呈し、長径約10cm・15cm・20cm、深さ約2～9cmを測るものが見られる。断面は、鍋底形を呈するものが多数を占める。遺構番号としては、R-12グリッドNo.3・4・5・7・8、R-13グリッドNo.1・3・4・5・6・7・9・11・12・13・14・15・16・17・18。出土遺物は、S-20グリッドのピットより石器材（第3表 番号36）と徳之島カムイ窓須恵器（第3表 番号37・第14図2 図版8の2）が出土している。

耕具痕とした遺構は、平面が梢円形や略三角形を呈する。長径約12cmと20cm、深さ約2～5cmを測るものと約8cmを測るものが見られ、断面が略V字状を呈する（図版4 4段目右）。遺構番号としては、R-12グリッドNo.1・2・6・9、R-13グリッドNo.2・8・10である。

2. 土坑

Q-17グリッド（標高約78.9m）において、長径約120cm、短径約100cmの平面が梢円形の遺構が検出された。深さは、約20cmと浅い。遺物としては、磁気反応を示す暗褐色の塊（マンガン）を採取している。半裁した際の土壤については、サンプリングとして採取した。

3. 炭溜遺構

Q-16グリッド（標高約79.0m）において、長径約200cm、短径約180cmの平面が不定形の遺構が検出された（図版5 2段目左）。深さは、約15cmを測る。炭化物の混入が顕著であったが、周辺には焼けた痕跡（焼土）などは見られない。採取した炭化物1点について、科学分析（放射性炭素年代測定）を行った結果、暦年較正年代はAD892～994（1103±20）との報告を受けた。また、炭化物堆積土層の下層（第Va層）から、沖縄貝塚時代中期土器（第3表 番号38・第13図1 図版7の1）が出土している。

4. 焼土遺構

S-20グリッド（標高約79.0m）において、直径約150cmの平面がほぼ円形の遺構が検出された（図版5 1段目右）。深さは約7cmと浅く、炭化物の堆積は希薄であった。また、底面及び壁面の赤化状況は希薄であった。出土遺物は、得られていない。半裁した際の土壤については、サンプリングとして採取した。

5. 溝状遺構

溝状遺構は、6本検出された。南北方向に3本、東西方向に3本であった。

O・P-10～15グリッドで検出された遺構は、幅約200cm、深さ約17cmを測り南北方向に延びている。北側の標高約81.1mから、南側の標高約79.1mで検出されている。P-16グリッド南壁の土層堆積中にもその断面が確認できることから、本来は調査区のさらに南側へと続く遺構であったことが分かる。溝の中央部分には拳大から人頭大の琉球石灰岩礫を列状に配しており（図版4 1段目右）、暗渠であった可能性が高い。第III層を掘り込んで形成され、かつ第II層に伴う遺構であることから、近世以降の所産と考えている。

M-12グリッド（標高79.6m～79.5m）及びQ-14・15グリッド（標高79.4m～79.3m）で検出されたものも、南北方向に延びている遺構である。幅約30cm、長さ約180cmを測るが、平面での検出状況は断片的で、全体の様子は判然としない。

R・S-18・19グリッド、R・S-20グリッド（標高約79.0m～78.9m）で検出されたものは、東西方向に延びる遺構である。前者は、幅約100cm、長さ約400cmを測り、後者は、幅約50cm、長さ約430cmを測る。いずれの遺構も深さは約10cmと浅い。土器片（第3表 番号39、番号35）がそれぞれ出土している。

Q-17グリッド（標高約78.8m）で検出されたものは、東西方向に延びる遺構で、幅約30cm、長さ約130cmを測るが断片的な検出にとどまり、全体の様子は判然としない。



第12図 Q・R-12・13グリッド平面図 (S=1/60)

第VI章 遺物

今回の調査では、土器及び徳之島カムイ窯須恵器を主体に、中国産陶磁器、滑石片、本土産陶磁器、沖縄産陶器、円盤状製品、羽口（？）、石器（石器材等）、獸骨、炭化物やマンガン（？）など多くの種類が得られた。

ここでは、土器、中国産白磁、徳之島カムイ窯須恵器、石器について記載する。

1. 土器

第13図1～5に図示した。1・2は、貝塚時代中期（縄文時代晚期相当期）、3～5は、グスク時代相当期と見られる。

1は口縁部の資料で、口縁部分は三角状に肥厚し、肥厚部分に粘土の積み痕が明瞭に見られる。胎土に石英、砂などの粗粒が混入し、器面の手触りはザラつく。

2は、胴部資料である。底部に近く、下部に粘土を貼り付けた底部の形成痕が見られる。内外面の調整痕も、明瞭に残る。胎土に石英、砂などの粗粒が混入し、器面の手触りはザラつく。3は、滑石製石鍋模倣土器の口縁部資料である。外面に方形の耳が取付き、口縁は平坦で内湾する。滑石粒を混入している。滑石粒は目視でも確認でき、器上部に顕著に見られる。4は、鍋形の底部資料である。底面は平坦で、下部から約3cmに積痕が見られる。内外面ともに丁寧なナデ調整が施され、手触り

第2表 沖縄諸島の暫定編年

本 土	沖 縄	土 器 形 式	沖縄諸島発見 の九州系土器	その他の縄年資料	現行編年
縦 文 時 代	I				早 期
	II	野国第四群 ヤブチ式土器 東原式土器	）糸形文土器	ヤブチ式 6670±140y.B.P. 東原式 6450±140y.B.P.	
	III	条纹文土器 宝可門縫式土器 皆伊の式土器 大原の式土器 仲野の式土器	条纹文土器 皆伊式土器	皆伊式土器（渡良瀬如東原） 4880±130y.B.P.	
	IV	面圓切底I式土器 面圓切底II式土器 面圓切底III式土器 面圓切底IV式土器 面圓切底V式土器	日暮志川A式 日暮志川B式 日暮志川C式 日暮野C式 日面圓窓底		
	V	仲野D式土器 仲野E式土器 伊波式土器 佐々木式土器 人見式土器 船川式土器	出土系土器 市来式土器	伊波式（熱田原） 3370±80y.B.P. 伊波式（熱田原） 3600±90y.B.P.	
	VI	宝川上層式土器 宝川中層式土器 仲原式土器		入船式並行 黒川式土器	
新 石 器 時 代	後 期 I	真栄里貝塚	板付式土器 馬ヶ原細脚土器		中 期
	II	具志原式土器	山ノ口式土器		
	III	アカジヤンガー式土器	免掛式土器	アカジヤンガー式は中津野 式並行か？	
	IV	フジシマ下層式土器 ○フジシマ下層式は縄時代初期とする見解もある。		新栄里器	

(1991年4月5日改訂)

は滑らかである。胎土に赤色粒、橙色粒の混入が見られる。5も、鍋形の底部資料である。底面は平坦になると思われる。底部際に約5mmの孔を外面から穿つ。内底に粘土が剥がれたとみられる痕跡がある。胎土に、白色細粒の混入が見られる。

2. 中国産白磁

第13図6～8に図示した。3点ともに碗の口縁部資料である。

6は玉縁口縁碗で、玉縁に丸味が見られる。内外面に、薄い透明釉を施す。外面の口縁下端に、釉が剥がれた痕跡がある。7も玉縁口縁碗で、口縁の中程に浅い段が廻る。口縁の直下に、ヘラによる界線が施される。内面の口縁上端には、ヘラ削り痕が残る。外面に薄い透明釉を施すが、外面の一部に黄色の渦りが見られる。8も、玉縁口縁碗である。口縁部と胴部の境に、浅い凹線を廻らす。内外面に、薄い透明釉を施す。外面に、釉垂れが見られる。

3. 徳之島カムイ窯須恵器

第14・15図に図示した。

第14図1は、口縁部から胴部にかけての資料である。口縁部上面は平坦で、断面形「T」字状になる。内面に蓋受け部が張り出すことから、ここでは急須とした。蓋受け部と口縁部との境に、成形時の粘土の積み痕が明瞭に残る。内外面ともに、調整痕は明瞭である。外面は褐色を施す。艶はなく、手触りはザラつく。内面から口縁部にかけては、露胎となる。

第14図2～4、第15図1～5は、全て胴部資料である。傾きを元に第14図の2～4の器種は壺とした。第15図1～5は、器種不明である。第14図2は、僅かに頸部が残存する。「ハ」の字形に肩部が張る形状である。外面は薄く、黄色味がかり艶はない。内面は、丸味のある三角状の押圧文が見られる。色調は内外面とも灰色を呈し、中心部は赤褐色を呈する。3は、上部が僅かに内傾する胴部資料である。外面に綾杉状の叩き文、内面は先端弧状の格子押圧文を施す。色調は外面オリーブ黒色、内面は灰色を呈し、中心部は赤褐色を呈する。器全体に、白色細粒子の混入が見られる。4は、ほぼ直立する胴部資料である。外面は綾杉状の叩き文が一部ナデ消される。内面は格子押圧文を施す。色調は内外面がオリーブ黒色、中心部は赤褐色を呈する。器全体に白色細粒子の混入がみられる。第15図1は、やや外側に開く胴部資料である。外面はナデ消しされるが、僅かに綾杉状の叩き文が確認できる。内面は、格子押圧文と斜線が組み合う。色調は内外面ともオリーブ黒色を呈し、中心部は赤褐色を呈する。器全体に、白色細粒子の混入が見られる。2は、残存上部がやや直になる胴部資料である。外面は綾杉状の叩き文、内面は格子押圧文を施す。色調は外面が灰色で、内面は暗オリーブ灰褐色を呈し、中心部は赤褐色を呈する。器全体に白色細粒子の混入が見られる。3は上部に向かい大きく開く、底部に近い胴部資料である。外面は、ナデ調整を施される。内面は、回状の稜が明瞭である。色調は外面がオリーブ黒色で、内面は褐色を呈し、中心部は赤褐色を呈する。4も上部に向かい大きく開く、底部に近い資料である。外面は線状の叩き文、内面は格子押圧文を施す。色調は内外面とも灰色を呈し、中心部は赤褐色を呈する。器全体に白色細粒子が僅かに混入する。5は、ほぼ直立する胴部資料である。外面は線状の叩き文を施す。内面は器面が荒れており判然としないが、格子押圧文が僅かに確認される。両面ともに艶はない。器全体に白色細粒子の混入が見られる。

4. 石器

第16図の1～4に図示した。何れも二次加工を施され、器種を判断できない。そのため元の器種での完形品は見られない。

1は、敲石または石斧の二次加工と見られる。表面は上部に敲打調整痕があり、他は研磨される。敲打痕から左右に稜を造る。裏面は大きく剥離面が造られ、その周辺に細かい剥離が見られる。平面及び側面の形状は、一見ヤコウガイ(蓋)の貝刀を想起させる。2は、磨石の二次加工と見られる。磨石の側面を利用し、横断面は蒲鉾状である。表面は全面研磨され、上部と裏面は大きく剥離面を造る。器周辺には、細かい剥離が見られる。縦断面の表面側

は滑らかなる弧をなし、裏面側は剥離により抉られる形狀である。搔器を思わせる。3は、磨石などの二次加工と見られる。表面は剥離と研磨で整えられた凸形状。裏面と他の面は大きく剥離を施し、研磨され平坦になる。縦、横断面とも台形状である。4も、磨石などの二次加工と見られる。表面は、元の研磨面に剥離を施されている。裏面は大きく剥離が施されるが、磨石の面が多少残る。表裏面の剥離が合わさる辺は薄く造られ、刃部の様になる。

第3表 ドット遺物一覧

遺物番号	グリッド	ドット番号	場所	遺物の種類	X座標 (m)	Y座標 (m)	Z座標 (m)	取上げ年月日	検出番号	備考
1	J-9	①	地山上	石器(石斧)	22846.544	21496.406	80.081	2019.12.03	第13回 1	
2	K-9	①	地山上	真珠小屋 土器	22845.662	21501.904	80.07	2019.12.03	第13回 2	第13回 6回
3	L-15	II-V	地山	グスク土器	22822.562	21505.188	79.612	2019.11.20		
4	M-12	①	II-V	石器(石斧)	22835.729	21511.442	79.648	2019.11.30		
5	M-13	①	II-V	土塊	22829.562	21511.149	79.357	2019.11.30		
6	M-14	①	II-V 地山	石器(石斧)	22827.857	21511.583	79.295	2019.11.25		
7	"	②	"	真珠小屋 土器	22825.636	21511.385	79.214	"		
8	N-13	①	II-V	真珠小屋 土器	22829.776	21515.055	79.336	2019.11.30		
9	"	②	II-V	石器(石斧) ?	22832.011	21515.056	79.418	"		
10	O-12	①	II-V	カムイ東 須恵器	22834.971	21518.496	79.820	2019.11.30		
11	"	②	"	沖縄陶 須恵器	22836.958	21520.287	79.943	"		
12	O-13	①	II-V	グスク土器	22829.955	21517.976	79.425	2019.11.30	第13回 4	第13回 7.6回
13	"	②	II-V	カムイ東 須恵器	22831.704	21518.219	79.536	"	第13回 6	第13回 6回
14	O-15	II-V	"	真珠小屋 土器	22824.111	21518.433	79.049	2019.11.25		
15	O-16	II-V 地山	"	ニビ	22821.072	21519.100	79.023	"		取上げ無し
16	Q-12	①	II	中国産の磁	22833.399	21526.131	79.606	2019.11.30	第13回 8	第13回 8.6回
17	"	②	II-地山	チャコ	22836.936	21528.231	80.188	"		
18	"	③	"	カムイ東 須恵器	22831.572	21525.378	79.627	2019.11.30	第13回 4	第13回 4
19	"	④	"	カムイ東 須恵器	22831.522	21525.451	79.616	"	第13回 1	第13回 6回
20	"	⑤	"	石器(石斧)	22832.130	21525.609	79.565	"	第13回 4	第13回 10回
21	"	⑥	"	羽口?	22832.686	21524.916	79.723	"		
22	"	⑦	ガアゼ	真珠小屋	22830.048	21524.082	79.503	"		西壁(アゼ)
23	"	⑧	"	カムイ東 須恵器	22829.522	21525.251	79.573	"	第13回 5	第13回 9.6回
24	Q-16	地山上	石器(石斧)	真珠小屋	22817.901	21525.696	76.927	2019.12.02		
25	Q-17	地山上	石器(石斧)	真珠小屋	22816.568	21526.795	76.885	2019.12.02	第16回 3	
26	Q-18	①	地山上	真珠小屋 土器	22810.622	21528.293	76.722	2019.12.02		
27	"	②	"	カムイ東 須恵器	22810.657	21525.262	76.719	"	第14回 4	
28	"	③	"	カムイ東 須恵器	22810.771	21524.661	76.731	"	第14回 3	
29	"	④	"	カムイ東 須恵器	22810.786	21524.624	76.730	"	第14回 3	
30	"	⑤	"	カムイ東 須恵器	22810.954	21524.735	76.729	"	第15回 2	
31	"	⑥	"	カムイ東 須恵器	22811.180	21524.555	76.775	"	第15回 9.6回	
32	R-12	①	地山上	グスク土器	22834.275	21529.164	78.699	2019.12.03	第13回 3	
33	"	②	"	石器(石斧)	22834.296	21529.690	78.724	"	第13回 2	
34	R-18	地山上	カムイ東 須恵器	22830.490	21528.679	78.861	2019.12.02	第15回 1	第15回 10回	
35	R-20	漢代遺構内	土器(刀削)	真珠小屋	22804.822	21532.196	78.933	2019.12.04	漢代遺構内	
36	S-20	ピット内	牛骨(刀削)	石器(石斧)	22804.931	21533.039	78.905	2019.12.04	ピット内	
37	"	"	"	カムイ東 須恵器	22804.948	21532.941	78.918	"	第14回 2	第14回 8.6回
38	S-16	虎溝Ⅱ遺構	半瓦(地山内)	真珠小屋	22819.110	21525.777	78.995	2019.12.04	第13回 1	
39	R-19	漢代遺構内	半瓦(地山内)	真珠小屋 土器	22809.124	21532.096	78.939	2019.12.04	漢代遺構内	

第4表 土器、中国産白磁窓観察一覧

検証番号 図版番号	種類	基種	部位	口径	高さ	底径	器厚	色調			出土地点	
								外面				
								白色	青色	黒色		
第13回 1 図版7の1	沖縄貝塚 中腹上部	瓶形	口縁部	—	—	—	8.4	明赤褐色 (D19E3.0)	明赤褐色 (D19E3.0)	明赤褐色 (D19E3.0)	口縁部は3角形に彫刻。肥厚部分に側面上の輪郭が見られる。	Q-16 海山底上 島号16
第13回 2 図版7の2	沖縄貝塚 中腹上部	瓶形	瓶底	—	—	—	8.1	明赤褐色 (D19E3.0)	暗赤色 (D19E3.0)	褐色 (D19E3.0)	瓶底部は平面に輪郭を有する。側面上に輪郭が見られる。斜面の輪郭が膨らむ。	Q-16 海山底上 島号16 Q-16ドット②
第13回 3 図版7の3	デスク上部	圓形	口縁部	—	—	—	8.8	明赤褐色 (D19E3.0)	紅褐色 (D19E3.0)	褐色 (D19E3.0)	口縁部に方型の凹凸がある。側面に輪郭が見られる。斜面の輪郭が膨らむ。	Q-12 海山底上 島号12 Q-12ドット③
第13回 4 図版7の4	デスク上部	圓形	底部	—	—	—	6.8	褐色 (D19E3.0)	紅褐色 (D19E3.0)	褐色 (D19E3.0)	底面には大きな花紋模様。下部から3cmほど下に輪郭が見られる。外側に大きな輪郭が見られ、半輪郭は明らかに赤色。側面の輪郭が見られる。	Q-13 沖・矢張 島号13 Q-13ドット①
第13回 5 図版7の5	デスク上部	圓形	底部	—	—	—	6.8	赤褐色 (D19E3.0)	明赤褐色 (D19E3.0)	褐色 (D19E3.0)	底面には大きな花紋模様。下部から3cmほど下に輪郭が見られる。外側に大きな輪郭が見られ、半輪郭は明らかに赤色。側面の輪郭が見られる。	Q-16 海山底上 島号16 Q-16ドット③
第13回 6 図版7の6	中国南 白磁	碗	口縁部	—	—	—	8.6	灰白色 (D19E3.0)	灰白色 (D19E3.0)	灰白色 (D19E3.0)	底面の口縁部。下端の大きさ12mm。厚さ5mm。内・外側に輪郭が見られる。外側の一部に赤色の斑状が見られる。	P-12 Ⅱ層 島号16
第13回 7 図版7の7	中国南 白磁	碗	口縁部	—	—	—	8.6	灰白色 (D19E3.0)	灰白色 (D19E3.0)	灰白色 (D19E3.0)	底面の口縁部。下端の大きさ12mm。厚さ5mm。内・外側に輪郭が見られる。外側の一部に赤色の斑状が見られる。	Q-16 海山底上 島号16 Q-16ドット③
第13回 8 図版7の8	中国南 白磁	碗	口縁部	16.0	—	—	8.5	灰白色 (D19E3.0)	灰白色 (D19E3.0)	灰白色 (D19E3.0)	底面の口縁部。下端の大きさ5mm。厚さ5mm。内・外側に輪郭が見られる。外側の一部に赤色の斑状が見られる。	Q-12 Ⅱ層 島号16 Q-12ドット③

第5表 徳之島カムイ窓須恵器観察一覧

検証番号 図版番号	種類	基種	部位	口径	高さ	底径	器厚	色調			出土地点	
								外面				
								白色	青色	黒色		
第14回 1 図版8の1	セミトマ 黒底器	盃形	口縁部	10.4	—	—	6.4	灰黒褐色 (D19E3.2)	灰褐色 (D19E3.2)	褐色 (D19E3.2)	口縁部上面は平滑。形状は「T」字形。断面は弧形で内側に突出。側面に成形時の跡がある。内側に輪郭が見られる。	Q-12 Ⅱ・Ⅲ層 島号10 Q-12ドット②
第14回 2 図版8の2	セミトマ 黒底器	盃	瓶底	—	—	—	8.7	灰褐色 (D19E3.1)	褐色 (D19E3.1)	褐色 (D19E3.1)	素の質感で、側面が繊維である。内側は内外面共に灰色。中心部は赤褐色を呈する。側面は、薄く質感がかけ離れて見える。内側は、尖端のある三角形の側面突起が見られる。	Q-20 ビートル 島号11 手鏡(折鏡)
第14回 3 図版8の3	セミトマ 黒底器	盃	瓶底	—	—	—	8.7	灰褐色 (D19E3.1)	褐色 (D19E3.1)	褐色 (D19E3.1)	側面資料。内面は内外面共に灰色。中心部は赤褐色を呈する。	Q-18 海山底上 島号19 Q-18ドット③
第14回 4 図版8の4	セミトマ 黒底器	盃	瓶底	—	—	—	8.6	灰褐色 (D19E3.1)	灰褐色 (D19E3.1)	褐色 (D19E3.1)	側面資料。内面は内外面共に灰色。中心部は赤褐色を呈する。	Q-18 海山底上 島号17 Q-18ドット②

第6表 徳之島カムイ窓須恵器観察一覧

単位: cm.

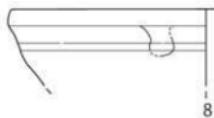
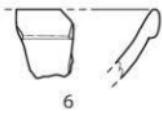
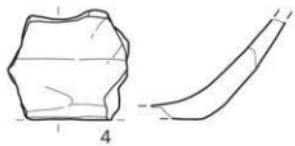
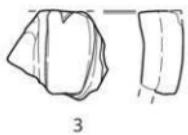
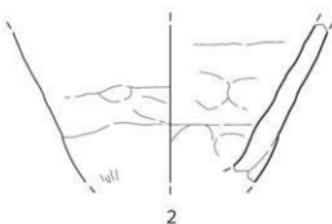
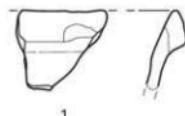
掲出番号 図版番号	種類	部位	口径	底高	底径	厚さ	色調			出土地点	
							外面				
							内面	裏地			
第15図 1 図版9の1	カムイ窓 須恵器	不明	縁部	—	—	—	0.5	村山P-7 黒色 (B33.7)	村山P-7 黒色 (T.33.7)	表面資料。色調は内外表面に灰色。半心部 は黒褐色で、テクスチャは織物状の凹凸を有す。 内面は、テクスチャは織物状の凹凸を有する。 少數の小孔が開いてある。内部は、格子状底文。 上部縁部は黒褐色。 底全体に、白色の細胞子が混入。	Q-18 地山直上 番号34 Q-18 ドット④
第15図 2 図版9の2	カムイ窓 須恵器	不明	縁部	—	—	—	0.5	灰褐色 (B34.1)	村山P-7 赤褐色 (T.34.1)	表面資料。色調は内外表面に灰褐色。半心部 は黒褐色を呈する。 内面は、テクスチャは織物状の凹凸を有する。 内部は、格子状底文。 底全体に、白色の細胞子が混入。	Q-18 地山直上 番号36 Q-18 ドット④
第15図 3 図版9の3	カムイ窓 須恵器	不明	縁部	—	—	—	0.7	村山P-7 黒色 (B34.7)	村山P-7 灰褐色 (T.34.7)	表面資料。色調は内外表面に灰色を呈する。 半心部は黒褐色で、テクスチャは織物状の凹凸を有す。 内面は、黒褐色。 底全体に、白色の細胞子が混入。	Q-13 IV・V層 番号18 Q-13 ドット②
第15図 4 図版9の4	カムイ窓 須恵器	不明	縁部	—	—	—	0.8	灰褐色 (B34.8)	灰褐色 (T.34.8)	表面資料。色調は内外表面に灰色を呈する。 半心部は黒褐色で、テクスチャは織物状の凹凸を有す。 内面は、黒褐色。 底全体に、白色の細胞子が混入。	Q-13 III・IV層 番号18 Q-13 ドット③
第15図 5 図版9の5	カムイ窓 須恵器	不明	縁部	—	—	—	0.7	灰褐色 (B34.7)	灰褐色 (T.34.7)	表面資料。色調は内外表面に灰色を呈する。 半心部は黒褐色で、テクスチャは織物状の凹凸を有す。 内面は、黒褐色。 底全体に、白色の細胞子が混入。	Q-13 亂層 番号23 Q-13 ドット⑤

第7表 石器観察一覧

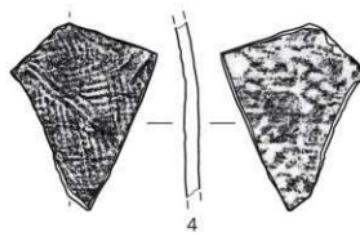
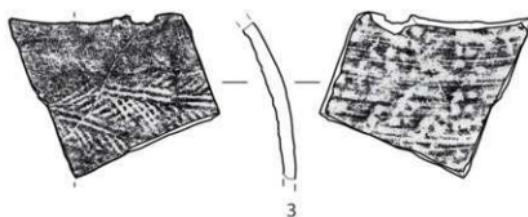
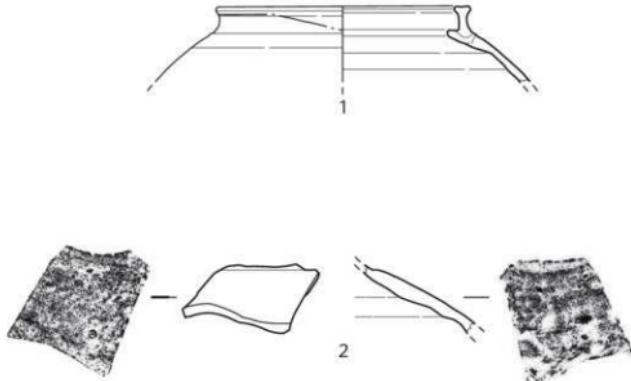
単位: cm. g

掲出番号 図版番号	種類	部位	石材	最大長	最大幅	厚さ	重さ	備考	出土地点
第16図 1 図版10の1	—	—	緑色片岩	6.0	5.2	2.8	105.7	磨石または石斧の二次加工と見られる。 表面は上部に敲打痕があり、研磨される。 これはよく剝離部とその周辺に相 互に剥離面を見る。また、刃部は、 ヤコウガイ面の貝刀を想起させる。	J-9 地山直上 番号1 J-9 ドット①
第16図 2 図版10の2	—	—	砂岩	6.3	4.6	2.1	51.2	磨石の二次加工と見られる。 表面は全面研磨される。表面は大きく剝 離し、抉られる。周辺に細かい剝離が見 られる。 磨削面は、三日月状。	Q-12 地山直上 番号33 Q-12 ドット②
第16図 3 図版10の3	—	—	—	2.9	5.5	2.1	26.3	磨石などの二次加工と見られる。 表面は全面研磨される。表面は大きく剝 離し、抉られる。周辺に細かい剝離が見 られる。 磨削面は、台形状。	Q-17 地山直上 番号25 Q-17 ドット③
第16図 4 図版10の4	—	—	チャート	7.1	9.1	3.5	210.0	磨石などの二次加工と見られる。 表面は主に研磨面と剝離面で構成。 表面は、大きく剝離のあと研磨される。 剝離面2面あり、合わせた部分は薄く方 の様になる。	Q-13 III・IV層 番号20 Q-13 ドット③

※石質は未測定

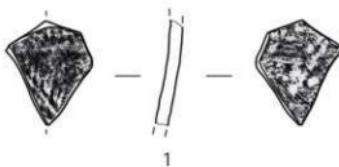


第13図(図版7)土器1~5、中国産白磁6~8

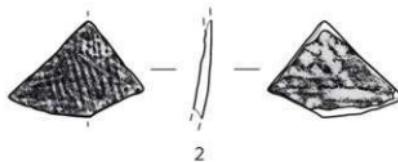


0 10cm

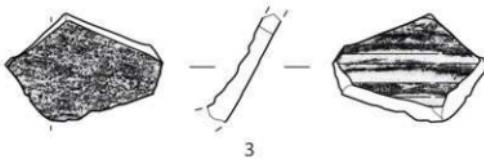
第 14 図 (図版 8) 德之島カムイ窯須恵器 1 ~ 4



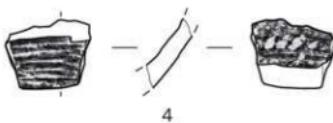
1



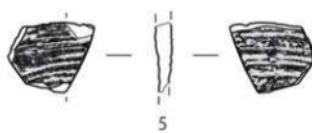
2



3



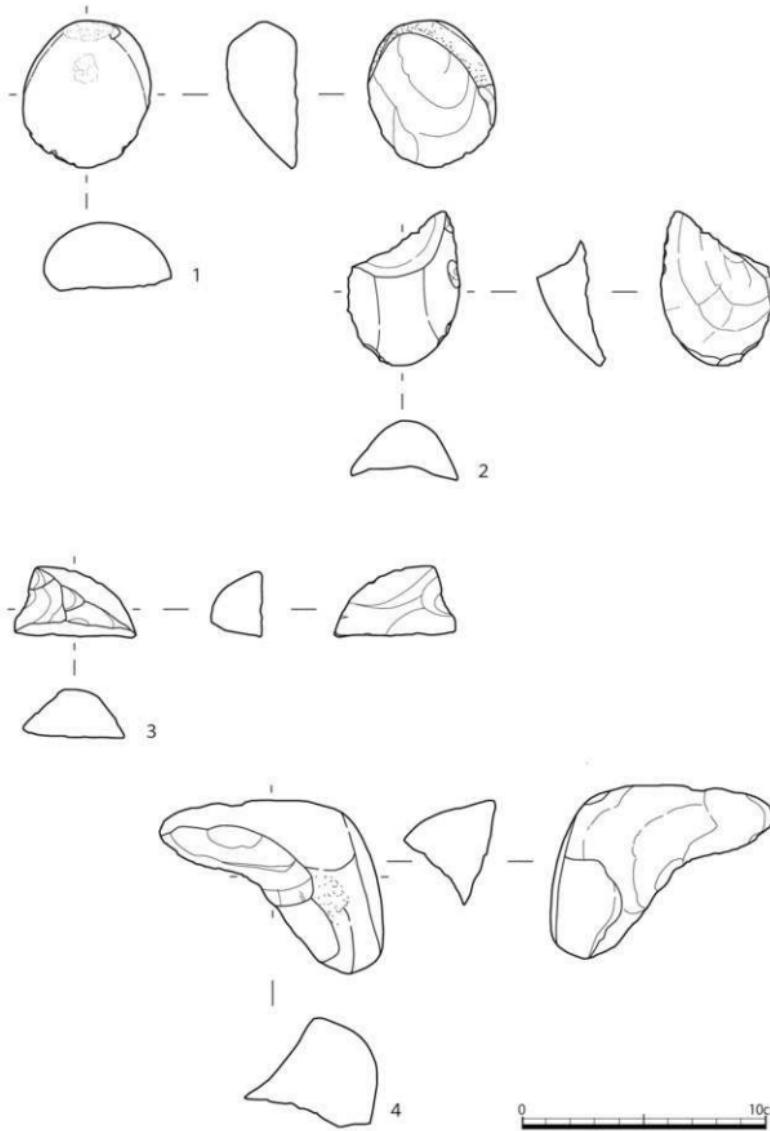
4



5



第15図(図版9)徳之島カムイ窯須恵器1~5



第 16 図 (図版 10) 石器 1 ~ 4

第VII章　まとめ

前章までに、今回の調査成果について述べた。第I章でも述べたとおり、調査の契機は、「宗教法人光明寺　沖縄別院建設計画」に伴うものであった。ここでは、今一度その成果を踏まえてまとめしたい。

【遺跡の立地】

本遺跡の位置する沖縄県那覇市字真地は、世界遺産「首里城」「園比屋武御嶽」「玉陵」が所在する首里台地の南側、安里川と国場川に挟まれた「識名台地」に位置する。安里川・国場川は市域の東側の台地から東シナ海へと西流し、それぞれが泊港・那覇港に注いでいる。この地域は、世界遺産「識名園」や拝所である「シイマノ嶽」など、多くの文化財も所在する閑静な佇まいの地域である。

今回の調査区は、沖縄貝塚時代中期（縄文時代晚期相当期）の「識名園内遺跡」や、1956年に多田真淳氏によって発見されたグスク時代の「シーマ御だけ遺跡」が近接する台地上に所在する。

多和田真淳氏による、

「(前略) 察度は恐らく識名の島ぐるみを都として造営し、城壁の中に官公衙、住民をもそっくり包含するつもりであったが、国場川と金城川に挟まれた広大な地域に、延々城壁を築くことは理想的ではあったが、多額の費用と日々を費やすため、当時の事情（多額の失費、人的口口の不足、貿易権のそう失等）からをやむを得ずとして、しかたなく首里の地を選んだと思う。識名にあるシイマのお嶽の史跡は消え失せているが、年中祭事として残っている祭事が何となくそれを物語っているような気がする。」

や、伊波普猷氏による、

「(前略) 次には首里遷都の問題になるが、首里親園の建設は多分浦裏攻略以降で、これについては別に記録とはなく、ただ尚巴志が「しより社」一帯の高地に王城を築いた時、島裏大里から首里まで、半里ごとに、人夫を立てて、いわゆるリレー式に大里城の石を首里に運んだという首里の伝説や、最初王城は識名の高台に物色してあったのを、首里に変更したという識名辺の口碑にほの見えているだけである。(後略)」

など、察度・尚巴志による首里城への遷都を述べる際に、識名（台地）に触れる指摘があり、興味深い土地柄でもある。

また、平成5年度に、那覇市水道局による真地配水池建設に伴う発掘調査が実施されたグスク時代を主体とする「識名シーマ御嶽遺跡」では、土留め状遺構や集石遺構、ビット群（列状ビット群）などが検出されている。出土遺物としては、12世紀代の玉縁口縁白磁、14世紀後半～15世紀代の青磁・白磁、16世紀以降の青花等の他に僅かなグスク土器と、さらに沖縄貝塚時代後期に属する土器・羽口・滑石製品などが得られており、同地域における貴重な調査成果となった。

【遺跡の層序】

さて、本遺跡の層序は、大きく五枚に大別した（第7～9図）。最上部の第I層は、表土層である。次に第II層は、近世以降の土層と考える。

暗褐色及び一部黒色を呈する第Ⅲ層及び第Ⅳ層が、本遺跡の主要な遺物包含層である。第Ⅲ層は四枚に細分したが、その層間及び第Ⅳ層との間に、時期的な相違は見いだせなかった。両層合わせて、層厚約50cm～80cmの堆積である。最下層は第Ⅴ層で、二枚に細分した。第Va層はマージ土を主体とするが黒色味を帯びる色調を呈し、暗褐色の塊（マンガンとして扱った）が多数混入する。調査中は、「黒マージ」と便宜的に呼称した。第Vb層が、地山の赤土（島尻マージ）である。

【遺構】

今回の調査で確認された遺構は、ピット・耕具痕、土坑、炭溜遺構、焼土遺構、溝状遺構であった（第10～12図 図版4・5）。調査区の東側に集中している。調査区は、北側（標高約80.3m）から南側（標高約78.8m）にかけて、やや傾斜する。その地形に沿って延びる窪地状の地形の縁辺部にピットや耕具痕が集中し、他の遺構が散在する。調査区中央で検出された溝状遺構は、近世期の所産と考えられる。なお、調査区南側で確認された遺跡の範囲（遺物包含層）については、現地保存されることになった。

【遺物】

出土遺物は、全体的に小片で得られている。これは、調査区での擾乱を示していると考えられ、確認された遺構と合わせて、本調査区の性格をうかがわせる。

種類としては、大分類としての集計であるが、土器（509点）、中国産陶磁器（29点）、徳之島カムイ窯須恵器（147点）、本土産陶器（38点）、沖縄産陶器（306点）、円盤状製品（6点）、羽口？（28点）、滑石片（11点）、石器類（179点）、炭化物（43点）、マンガン（3,618点）、製鉄関連（46点）、焼土等（1,459点）、獸骨（152点）、貝類（3点）など総数6,779点を数えた。

出土遺物の中で留意される資料としては、グスク土器（第13図3～5）、中国産白磁玉縁口縁碗（第13図6～8）、徳之島カムイ窯須恵器（第14・15図）、滑石片である。土器は、整理時間の都合上、そのほとんどの資料が未分類であるが、509点の内、グスク土器を11点含む。中国産陶磁器は、白磁が7点で、その内、白磁玉縁口縁碗が、試掘調査時を含め5点得られている。これ以外には、青磁（3点）、青花（1点）、褐釉陶器（8点）、その他（10点）が見られる。徳之島カムイ窯須恵器は、第Ⅲ・Ⅳ層として取り上げたものが63点、第Ⅳ層が23点、第Ⅱ層が16点である。滑石は、第Ⅳ・Ⅴ層が4点、第Ⅲ層が3点である。羽口？は全形を伺える資料がなく、暫定的なものとして集計した。また、マンガンや焼土等（土塊、その他）として取り上げた遺物の中には、磁気反応を示すものが、それぞれ299点・1,278点得られている。羽口？と合わせて留意される資料である。

【調査成果】

ピット・耕具痕などの遺構の確認と、12・13世紀前後を示す遺物の出土状況から調査区の性格を推測すると、当初は「グスク時代初期の生産（畑）の場」との解釈が想起された。しかし、自然科学分析の結果からは、栽培を示す明確な試料の検出はなされなかつとともに、放射性炭素年代測定では、9世紀末～10世紀末の年代値が示された。採取した土壤のフローテーション分析や、複数の炭化物の分析など別のアプローチも必要となるが、現時点では「生産遺跡」として断定できる状況ではない。「生産遺跡」以外としては、耕具痕などの遺構は、往時における土地開拓時（土地造成）の痕跡であり、

出土遺物が小片であるのは集落遺跡の周辺部であるためとも考えられる。

また、沖縄貝塚時代中期（縄文時代晚期）と見られる資料が得られたことも、大きな成果であった（第13図1・2）。土器509点のうち、第IV・V層（調査中に「黒マージ」と呼称した土層：第Va層が主体か）から小破片ながら25点が採取された。市内における同時期の遺跡の様相や出土した土層の由来の解明など、今後の課題として、あるいは研究テーマの一つとして貴重な資料となった。

【まとめ】

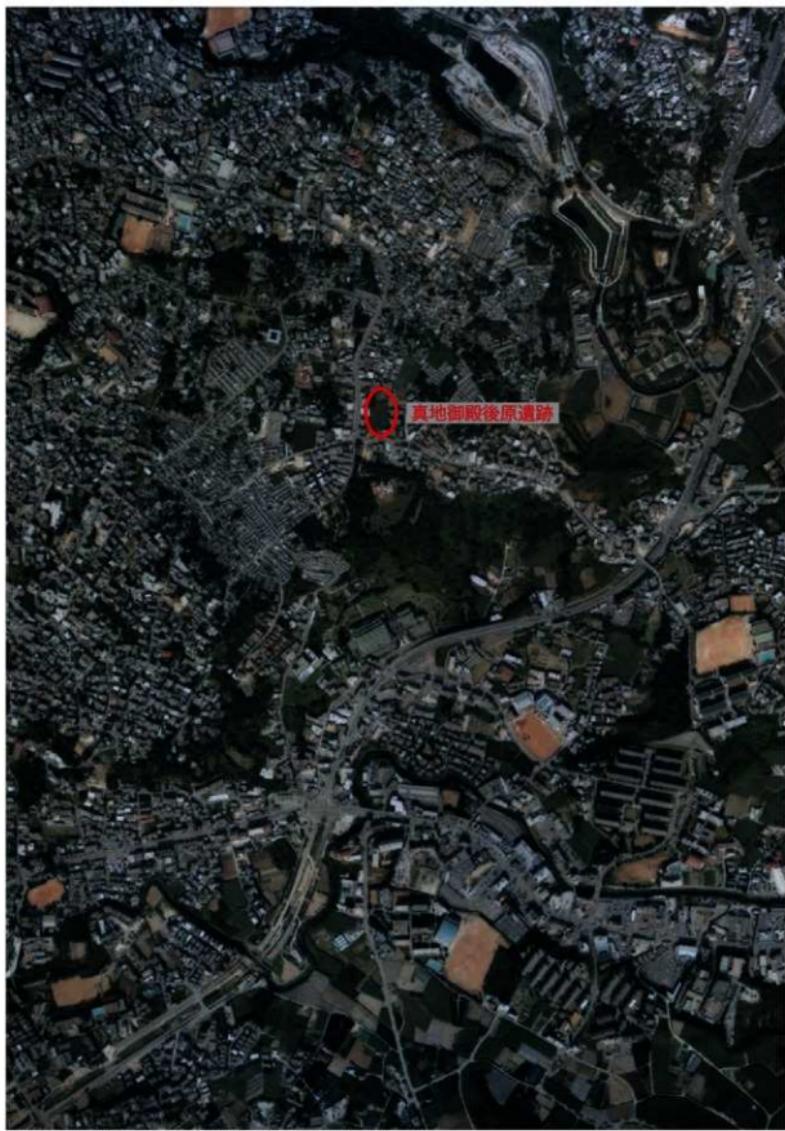
最後に、これまで本遺跡周辺での本格的な発掘調査事例は少なく、グスク時代主体の遺跡は、「識名シーマ御嶽遺跡」のみである。沖縄貝塚時代中期（縄文時代晚期）の遺跡である「識名園内遺跡」の本格的な調査は、行われていない。ただし、同じ「識名台地」に位置する繁多川・識名・上間集落付近においては、先史時代・グスク時代・沖縄近世期など多数の遺跡が所在することが知られており、小規模範囲ではあるが公共事業、事業所、個人住宅などの建築に伴った発掘調査が実施されている。

「識名台地」に所在する遺跡の詳細が明らかになれば、先史時代はもとより、グスク時代、琉球王国時代、沖縄近世期の新たな知見が加えられることが期待される。遺跡の分布や時期的な特徴を、集成・分析していくことが重要となる。

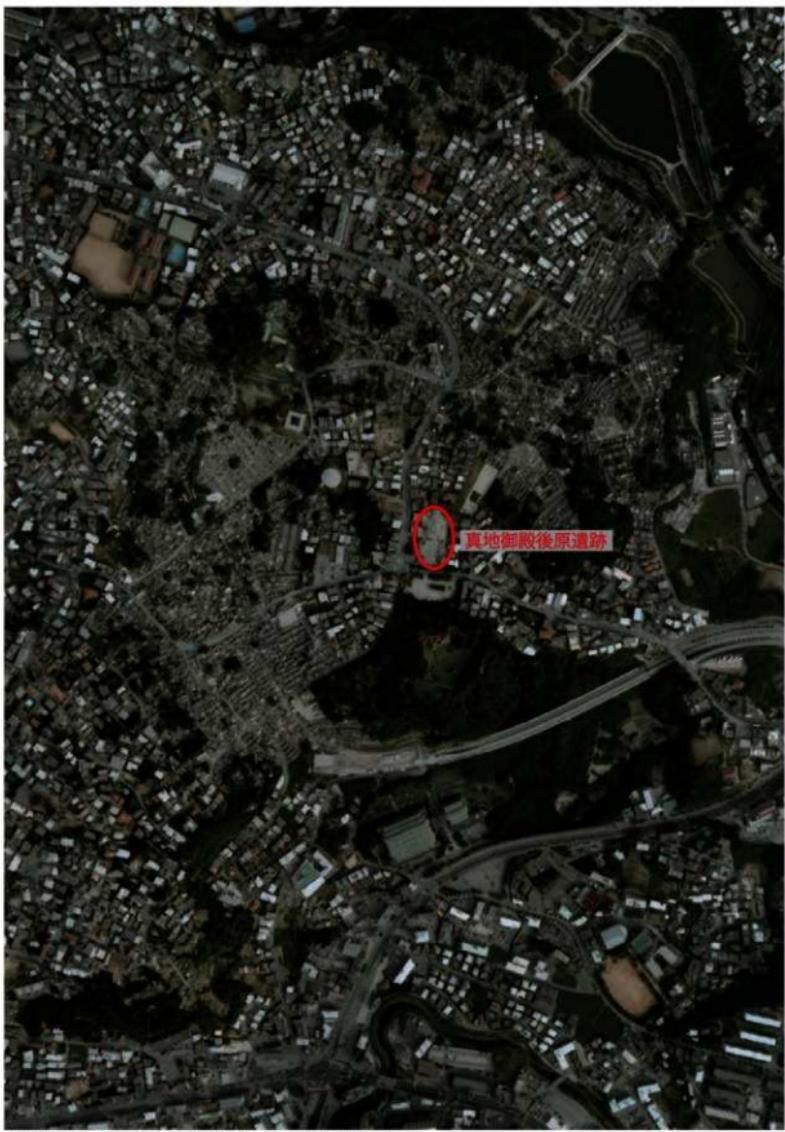
【引用・参考文献】

- 多和田真淳 「首里城の古戦と首里遷都 「舜天以前中国貿易説」に疑問(3)」 『琉球新報』1965年10月7日
- 伊波普猷 『沖縄歴史物語』 株式会社平凡社 1998年7月15日
- 『文化財要覧』1956年版 琉球政府 文化財保護委員会 1956年6月15日
- 那覇市文化財調査報告書 第5集 『那覇市の遺跡－詳細分布調査報告書一』 那覇市教育委員会 1982年3月
- 那覇市文化財調査報告書 第34集 『識名シーマ御嶽遺跡－真地配水池建設事業に伴う緊急発掘調査報告一』 那覇市教育委員会 1997年3月
- 那覇市文化財調査報告書 第26集 『ヒヤジョー毛遺跡－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告I－』 那覇市教育委員会 1994年3月
- 那覇市文化財調査報告書 第35集 『銘苅原遺跡－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告IV－』 那覇市教育委員会 1997年3月
- 那覇市文化財調査報告書 第31集 『安謝前原道路－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告III－』 那覇市教育委員会 1996年3月
- 那覇市文化財調査報告書 第69集 『神心寺跡－繁多川公民館・図書館建設工事に伴う緊急発掘調査報告一』 那覇市教育委員会 2006年2月
- 那覇市文化財調査報告書 第49集 『識名原遺跡－識名上間線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告一』 那覇市教育委員会 2001年3月
- 那覇市文化財調査報告書 第74集 『那覇市内道路I－個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査報告書一』 那覇市教育委員会 2007年3月
- 那覇市文化財調査報告書 第112集 『真珠道路（識名坂地区）－松城中学校東線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査一』 那覇市 2020（令和2）年1月

図 版



図版 1 遺跡一帯の空中写真（平成 5 年撮影）



図版 2 遺跡一帯の空中写真（平成 21 年撮影）



図版3 遺跡の遠景

1段目左：遺跡の遠景（北から）

2段目左：識名園と遺跡の遠景（南から）

3段目左：遺跡の全景（南から）

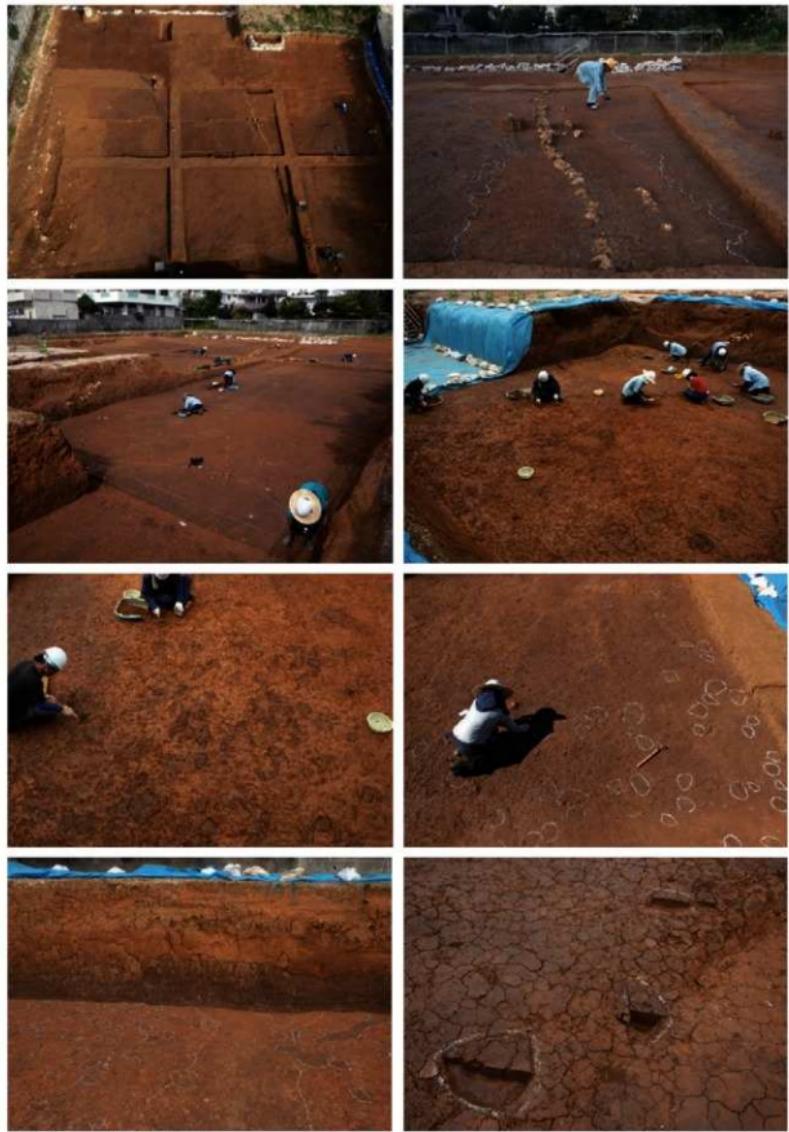
4段目左：遺跡の全景（南から）

1段目右：遺跡の遠景（北西から）

2段目右：識名園と遺跡の遠景（南から）

3段目右：遺跡の全景（南から）

4段目右：調査区全景



図版4 発掘調査の状況

1段目左：調査区全景

2段目左：調査状況 (南東から)

3段目左：遺構の検出状況 (S・R-18 グリッド)

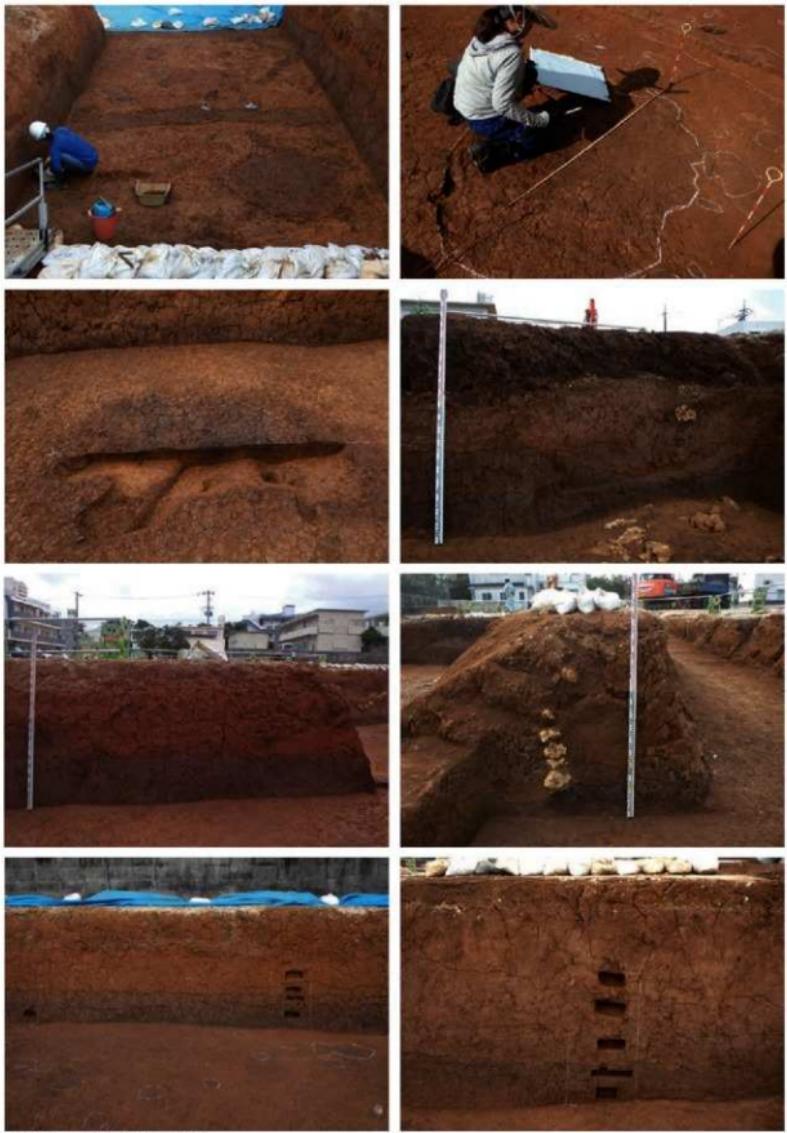
4段目左：遺構の検出状況と層序 (S-18・19 グリッド)

1段目右：溝状遺構 (近世) 検出状況

2段目右：調査状況 (北東から)

3段目右：遺構の検出状況 (R・S-14 グリッド)

4段目右：遺構の半裁状況 (R-12 グリッド付近)



図版5 発掘調査の状況

- | | |
|---------------------------------|---------------------------|
| 1段目左：溝状遺構と焼土遺構 (R・S-19・20 グリッド) | 1段目右：焼土遺構半裁状況 (S-20 グリッド) |
| 2段目左：炭溜遺構検出状況 (Q-16 グリッド) | 2段目右：遺跡の層序 (O-18 グリッド南壁) |
| 3段目左：遺跡の層序 (P-16・17 グリッド西壁) | 3段目右：遺跡の層序 (P-16 グリッド南壁) |
| 4段目左：遺跡の層序 (S-15 グリッド東壁) | 4段目右：遺跡の層序 (N-16 グリッド南壁) |



図版 6 発掘調査の状況及び資料整理の状況

1段目左：土壤サンプリング状況（東壁）

2段目左：出土遺物（中国産白磁）

3段目左：出土遺物の洗浄作業状況

4段目左：出土遺物の接合作業状況

1段目右：出土遺物（グスク土器）

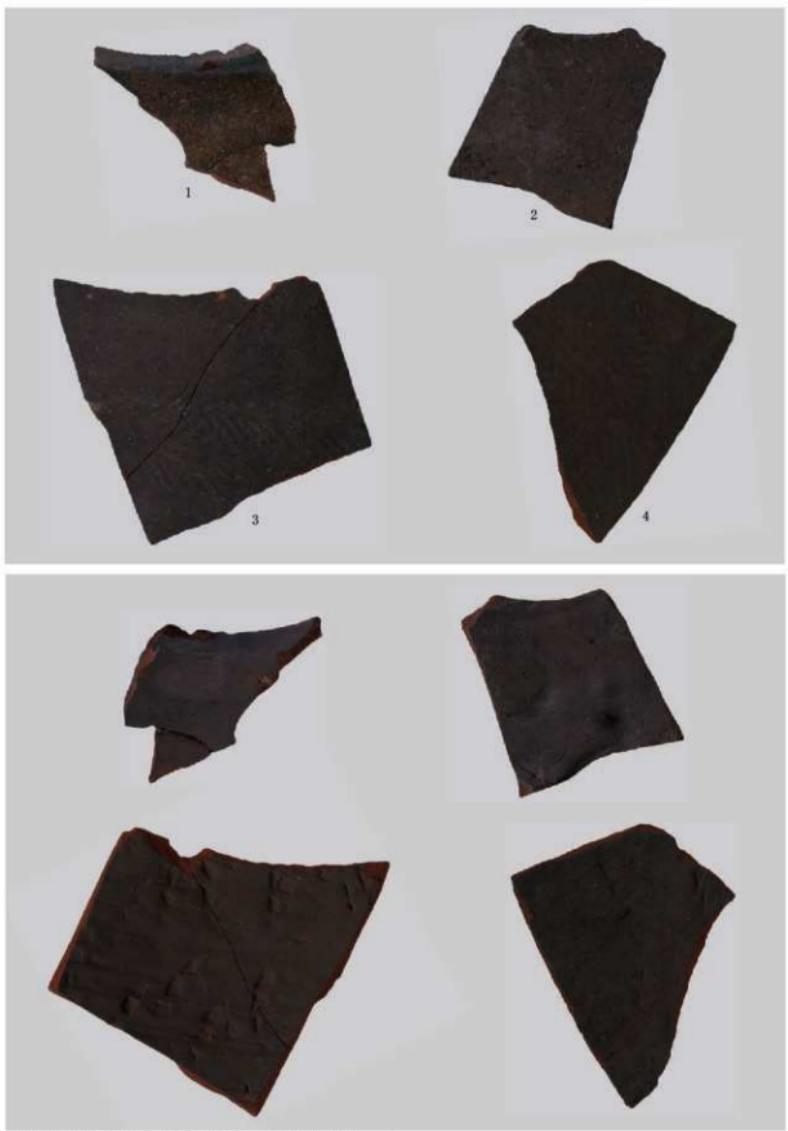
2段目右：出土遺物（徳之島カムイ窯須恵器）

3段目右：出土遺物の分類作業状況

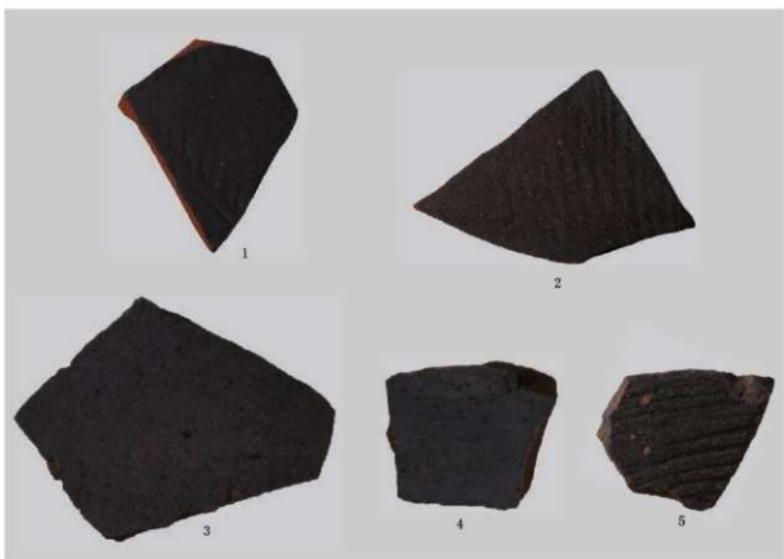
4段目右：出土遺物の集計作業状況



図版 7 (第 13 図) 土器 1 ~ 5、中国産白磁 6 ~ 8



図版 8 (第 14 図) 德之島カムイ窯須恵器 1 ~ 4



図版 9 (第 15 図) 德之島カムイ窯須恵器 1 ~ 5



図版 10 (第 16 図) 石器 1 ~ 4

報告書抄録

那覇市文化財調査報告書第 116 集

真地御殿後原遺跡

—光明寺沖繩別院建設に伴う緊急発掘調査報告—

発行 2022（令和4）年3月31日
那覇市
〒900-8585 沖縄県那覇市泉崎1-1-1

編集 那覇市 市民文化部 文化財課
TEL 098-917-3501
FAX 098-917-3523

印刷 株式会社 国際印刷
〒901-0147 沖縄県那覇市宮城1-13-9
TEL 098-857-3385
